
JOY

中村真央

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

JOY

【Nコード】

N1013Y

【作者名】

中村真央

【あらすじ】

事故で恋人を亡くして10年孤独に暮らしている浅井。10年目のクリスマス間近に慌しく運命が転がり始める。可愛いすぎる強引で横暴な天使に出会ってから。

白い天井

白い天井が不思議だと思った。

自分の部屋じゃない。

天井から下がったベージュのカーテンに囲まれている。
ぐるりと見回すと、ベッドの横に母親がいた。

そんなはずはない。大学進学で故郷を離れて半年が過ぎている。
これは、夢だ。浅井はそう思った。

「あら！起きたの！看護婦さん呼ばなきゃ！」

枕元に垂れているブザーを押すことにも気付かず母はザッとカーテンを開いて廊下に走り去った。

病院なのだと浅井はやつと気付いた。

ただどうしてこんなところに、と長い髪の毛をかきあげようと
して、頭の包帯に気付いた。

包帯？頭に？何？これ？

浅井が逡巡している間に若い女性看護師が飛び込んできた。

「あら～！よかった！浅井さん！あなたは外傷も少ないから意識だけが心配だったの！良かったわ～！」

わからない。わからない。浅井は頭を振った。

「うん、そうね、彼氏は残念だったけどね、あなたは彼に助けられ
たんだからね、頑張っていけないと！」

待って。

何この夢？なんでこんな夢みてるの？

「ああ、だめよ。あなた頭打ったんだからあまり動かさない！」
看護師に両手で頭をつかまれた。

「今先生来るから、今の状態教えてね。頭痛いとかはないのよね？」
つかまれた頭で頷いた。

医師が現れ、名前は何だとか今日は何日だとかここはどこだとか、
バカみたいな質問をされてバカみたいに答えた。

バカみたいな夢だ。きつとそれが表情に出たのだろう。

「バカな質問だと思ってるんだね。じゃあ大丈夫だ。よかったよか
った。あれだけの事故で奇跡だよ」

医師は浅井の膝あたりの布団をポンポンと叩いて、看護師と共に
出て行った。母もその後を追って出て行った。

あれだけの事故

彼氏は残念だったけどね

いくら夢でもひどすぎる。

どうして私がこんな夢を見るの？

ああ、きつと先輩が買ったばかりの車がスポーツタイプだから心
配なんだきつと。

そう思っているくせに、浅井はベッドを降りて椅子の脇に置いて
あった汚れた自分のスニーカーを履いて、病室を出た。

どうせ夢なんだから。そう思っているくせに、鼓動が速まる。

エレベーターで1階に降り、施設全体の案内図を見つけた。そし
て、それを地下に見つけた。

いないことを確認するんだ。

いたってどうせ夢なんだ。

混乱する頭で地下に降り、その場所を見つけて小走りになる。

どうせ夢なんだ。

一つずつドアを開ける。

知らない人が顔を向ける。礼をして閉める。それを繰り返す。

ほら。バカみたいだ。全部この繰り返しだ。

そう思っ てまたそつと開いた扉の向こうに、

先輩のお母さんがいた。

お父さんがいた。

弟がいた。

先輩のお母さんが立ち上がり、おおお、と喉の奥から溢れた声を両手で押さえ、また椅子に座り込んだ。

お父さんはおじぎをした。

先輩によく似た弟は、そのまぶたを真っ赤に腫らして、また白い布を被せられた顔をじつと見下ろした。

体は、大丈夫ですか。本当はそちらにすぐにお見舞いに向かわなければと思ったのですが、

この通り、龍がね、申し訳ないけどお見せできる顔じゃないから布は取れないんですけど、もしかしたらここでお別れかと思えますの
でね、

お父さんがそんなことを語っている。

どうしてここまで具体的な夢なんだろう。

近寄ってみた。

布は取れないって言ってたけど、取らなくても頭中包帯でぐるぐる巻き。きつと顔も包帯でぐるぐる巻き。

先輩、車の運転気をつけないとこんなことになっちゃうんだから。ああ、警告の夢なんだ、きつと。

耳だけが見えていた。

少しだけ傷がついた耳。

この耳は、先輩の耳だ。

私はよく知っている。

何度も何度もつまんだり囁いたり口をつけたりした。

先輩の耳の形だ。

先輩。

これは、この人は、先輩。

やっと浅井は、確認した。

白いシートで覆われた大柄な体。

これは確かに、先輩の体。

先輩の体が、霊安室で線香の香りに包まれていた。

その後の記憶がない。
また病室で目が覚めた。
まだ夢だと思っていた。

夢じゃないのだと気付くまで、三日かかった。

夢ではないのだと、先輩が死んだのだとわかった時には、浅井は
声を失った。

それも惜しくはなかった。

先輩を失ったのなら、惜しいものなんか何もなかった。
自分の命もいらなかった。
何もいらなかった。

全ていらなかった。

5時半の終業間際、鳴り響く電話を誰も取らない。

クリスマスも近い今日は金曜日で、みんなこの後の予定もあるのだからが我慢比べでもしているように、恐らく何のデータも入力せずにキーボードを叩いている。

結局客先からのクレームを処理したばかりの浅井が受話器も戻さずにその外線を取った。

「お待たせいたしました、」

の言葉も言い終わらないうちに、大声で捲くし立てられた。

『いつになったら持つて来るつもりなんだ！とつくに5時回ってんだろっ！』

浅井はその大声に受話器を耳から離して、右手で額を押さえた。

「失礼ですがお客様・・・」

『大森だ！大森！千種区！』

千種区・大森様・・・見覚えがある・・・とディスプレイに出荷予定を表示してスクロールする。

あった。設置予定明日午後5時。ビューティーサロン・フォレストイン。

『明日の開店に間に合やあいと思つて5時にしたのによ、今何時だよ？他の業者はもうとつくに引けてんだぞ！』

明日のオープンだ？

「申し訳ありません、ただいま確認いたしますのでもう少しお時間いただけますでしょうか」

『さっさとしろよ！』

「はい！すぐに！」

耳に受話器を挟んだまま浅井は通話を切り、ディスプレイに表示されている納入業社の社長の携帯の番号を呼び出し、繋げた。相手はすぐに出た。

『はい加藤』

「本社の浅井です。お疲れ様です。社長今どこですか？」

『ん？ヤード戻ってきたとこ』

「明日のティーサーバー、もうトラックに積んでますよね？」

『ああ？そうだな。明日はこれともう一件だから積んである』

「今から出てもらえますか？」

『ああ?!』

「もう一杯やってます？」

『やってないけどさ、今日丸一日設置と撤去で俺ずたばろだよ?』

「すみません。明日のティーサーバーが今日だったんです」

『知るかよ。そっちのミスだろうが』

「明日オープンの美容院なんです。あとティーサーバーだけ搬入がないらしくて」

『だからそっちのミスだろうって!俺はもう一杯やつちゃうよ!』

「じゃ、山下君は？水野君でも。ティーサーバーの設置なんて一人でも出来るじゃないですか」

『おお!そういうこと言うならあんたがやれよ』

「じゃあやります。迎えに来てください。送っても行ってくださいよ。それが社長の仕事じゃないですか」

『俺の仕事は明日請けたもんだっつゝの!』

「わかりました。私がタクシーでそちらまで行って、トラック運転して千種区まで行きます!」

『あんたトラック運転できんのかよ?』

「普通免許はあります。ペーパードライバーだけど」

『そんなのにうちのトラック貸さねーよ!わかったよ!俺が行くよ!』

「本当ですか！ありがとうございます！今度大型2件決まりそうなので必ず加藤設備に回します！」

『おっ・・・お、おう。まあ、これから出るとなると7時頃になるけどいいのか』

「すぐに出ていただければ！何とでも言い訳しますから！ありがとうございます！お氣をつけて！」

『ったく・・・。かなわんな。急いで行くわ』

「ありがとうございます！先方にもお知らせしますね！」

また受話器を肩に挟んだまま、さっきディスプレイに記録された千種区の大森の番号をダイヤルする。

「お待たせ致しました。星川商事です。本日納入予定のティーサーバーですね、前の現場が遅れましてまたこの時間渋滞に巻き込まれてまして、そちらに向かつてはいるのですが遅くなると連絡がありました。ご報告が遅れて申し訳ありません！」

『あ、ああ？何、それで結局何時になるの？』

「ええ、大変遅くなってしまっって申し訳ないのですが6時半までにはと・・・」

三十分サバ読んだ。

『一分でも遅れたらつかえすぞ！』

「連絡の遅れた私どものミスですので、なんとかお許しいただければと存じます。ドライバーが頑張っってそちらに向かつておりますので」

『そんなのは仕事なんだから当たり前だろ。まあいいわ。6時半な』

「私も完了報告があるまでここで待機してますのでお願いいたします」

『別にあんたには関係ないだろうが』

「私のミスですから」

『ふん。別に、受け取るから〇しは早く帰ることだ。今どき危ないんだからよ』

「ありがとうございます。それではお願い致します」

『はいはい。あんたは帰れよ』

「ありがとうございます。失礼いたします」

そしてやっと受話器を置いた。

そして、机につつぷした。

今の一件で何日分かの仕事をしたような気分だ。上手くいっただろうか。ミスはなかっただろうか。

浅井は会話を始めからリピートしてみた。

「・・・加藤社長、って言いました？あの社長この時間から動かし
たんですか？」

後ろから男子の声が聞こえる。

「電話一本であの怖い社長動かせるのって浅井さんぐらいしかい
ま
せんよねっ！」

女子の声も聞こえる。

つつぷした浅井がゆらりと体を起こし、後ろを向いた。

加藤社長とは別の外注業社の社員の大沢と、浅井の後輩事務員の
栗尾が並んで立っていた。

短い茶髪のイケメン大沢と、お姫様のように毛先をカールした栗尾がすっかり帰り支度で並んで立っていた。

その姿になぜか浅井は内心ムラッと怒りが沸いた。ただ反射的にムっとしたただけなので理由にも行き当たらず、少し顔を傾げて仕事に戻ろうとした。

「その、加藤社長の搬入終わるまで仕事終わらないんすか？」

大沢が訊ねてきた。少し不思議でまた振り向いた。大沢とはそれほど親しくはないのだ。

「今日の飲み会は、浅井さんも参加するって聞いてたんすけど、」
「え？今日だっけ？」

浅井は栗尾に視線を動かした。そういえば事務員全員と外注業社の社員有志が集まる会に参加すると申し出ていた。事務員全員と言っても十数人しかいないので、一人だけ欠席と言い辛かったただだったからいい理由ができたと思った。

「ああ、ごめん。私又キでやってもらえる？あんまり早くは終わらないと思うから」

元々乗り気の飲み会ではないし、会費も前払いしてあるから迷惑は掛からないはずだ。

「なんだあ。残念だなあ」

大沢が社交辞令を言ってくれる。

「しょうがないですよ！事務員で一番責任とれるのって浅井さんですもんね！」

栗尾が髪の毛をふわりと動かし、可愛い角度で大沢を見上げた。

その瞬間、気付いた。

「……栗尾さん、あなた明日の設置確認をお客様にとってなか

ったのね」

さっきのティーマーバー設置の、業務責任者印は、栗尾になっていたのだ。

「は？」

まだ栗尾は可愛い角度を変えない。

「お客様は今日搬入だとばかり思っていたそうよ。あなたは確認の電話を入れる責任があるわよね」

「あ、えーっと、きつとお話中だったと・・・」

「加藤社長が出てくれたからなんとかしてもらえたけど、」

「でも、それってお客様の勘違いが一番悪いんじゃないんですか？ 契約は絶対明日ですもん！」

「明日オープン美容院なの。あなたそのオーナーにそんなこと言えるの？」

「浅井さんなら言えますよー！」

栗尾がキャラキャラと笑った。

言わなきゃよかった。さらにむかついたただけだった。浅井はため息をついて椅子をくるりと正面に戻した。

直後にカツカツと高いヒールの歩く音が響いた。背の低い栗尾は高いヒールのブーツを履いている。

ピンクの短いファアのコートを羽織って。

ブランド物のハンドバッグを腕に掛けてイケメン大沢と街を歩くのだろう。

あ、そうだ。きつとこの子は沢君に気があるんだ。ああ、それでこんな妙なメンツのコンパなんだわ。ふうん・・・。

浅井が頬杖をついて頷くと後ろから声がした。

「あの。仕事終わってから合流すればいいんじゃないですかね？」
驚いて振り向くと、まだ大沢がいた。

「あら。気使わなくていいわよ。私ももう疲れちゃって飲みたい気分でもないし」

「でも、」

「いいわよ別に。私のための会でもないし。ほら。待ってるわよ」

含み笑いで一瞬だけ視線を出口にいる栗尾に向けた。

「また今度全社で忘年会があるじゃない。その時にね」

また椅子を戻して、浅井は右手をひらひらと振った。

楽しい飲み会など一度も経験はない。常に退屈なだけだ。それが一度減ることは全然残念などではない。

笑顔を向けても分かってももらえないだろうから浅井はそのままキーボードの操作に戻った。

「じゃあ・・・失礼します」

大沢のスニーカーがキュッと音を立てた。

ドアを開ける音がした時にちらりと二人を見送ると、街でよく見る似合いのカップルに見えた。

黒いダウンジャケットの中からパーカーのフードと裾を出し、山でも登るようなごつい靴を履いている長身の大沢と、髪の毛クルクルのコートフワフワな小さい栗尾。

ああ、結構なことですね。いよいよ寒くなってクリスマスですね。

寒くなってクリスマスが来て年末になり仕事納め。

私はそれまでは馬車馬だわ。

結局色気のない方向に思考を飛ばし、ため息をつく浅井だった。

課長と浅井しかいなくなった事務所に外線電話の音が響いた。

『おう、加藤だけど今現場終わりました』

電話を取った浅井が驚いた。

「もう?! まだ7時前ですよ!」

『おお、意外に道も空いてたし客がさ、設置手伝ってくれたからな』
「うわ、そんなことしてもらっちゃったんですか」

『そらそうだろ。本来明日の予定で契約書にも印鑑ついてんの確認させたからな』

「うわ・・・そんなことまでしちゃったんですか・・・」

『あつたりまえだろ。悪いけどよ、こつちだつてわざわざ行つてやった立場でだよ? いきなり喧嘩越しで命令しやがつてよ』

「はあ・・・」

『いくらお客様でもだな、謝るべきところは謝るのが筋つてもんやるが! つて怒鳴つてやったよ。契約書持ってきて納入期日を確認してみるや! つてな。ははっ。青くなつてたよ。笑うなあ』

「笑ったんですかあ・・・」

『そらそうやる。いきなり空気抜けたみたいに萎んじゃつてよう。

ま、こき使つてやったから勘弁してやるさ』

「・・・加藤社長、やっぱりそんな立場じゃない気がしますけど・・・」

『そんなん知らんよ。後はあんたの仕事やる。じゃ、そういうことで。お疲れさ〜ん』

嘘~~~~。お客様をこき使ったんですかあ~~~~・・・。

浅井は顔を右手で覆った。

確かに、契約は明日搬入になっている。勘違いしたのはお客様だ。お客様なのだ。こういう対応が一番難しい・・・。

お客様は神様だ。勘違いしたとしても神様だ。謝らせるのが筋ではないのが商売なのだ。

悩んでいてもしょうがない。とつと自分の仕事を終えよう。

浅井は、千種区の大森にダイヤルした。

「お世話になっております。星川商事の浅井と申しますが、」

そこまで言う前に、大森が電話を落としたかお手玉したかで雑音が入った。

「あつ、あ、星川さんね、あの、契約ね、明日だったみたいで申し訳なかったね、」

「いえ、今日は準備はしてありましたのでそうおっしゃっていただなくとも大丈夫だったんですよ。こちらも確認を怠ってしまつて失礼いたしました。こちらのミスでしたので無事設置できて安心いたしました。また何かご縁があればその時はよろしくお願いいたします」

「あ、ま、そう言ってもらえると助かるわ。ほんと、悪かったですね。次何かあったらほんと、声掛けますんで」

「ありがとうございます。設置のお手伝いもしていただいたようで恐縮です。ありがとうございます」

「いやいや、当たり前だし」

「明日のオープン頑張ってくださいね。おめでとうございます」

「ああ、ありがとうございます。千種区ですから、もしよかったらうちもご贖に」

「あら。ビューティーサロン・フォレストインですね。機会がありましたら」

「ほんとにね。お待ちしてます」

「はい。今日は遅くまでご苦労様でした」

「ああ、あなたもお気をつけてお帰りください」

「ありがとうございます。失礼します」

また浅井は、だくつと机に突つ伏した。疲れた。

逆ギレするタイプのお客様じゃなくてよかった。ほっとした。というか、同じく商売人なのだ。最後は宣伝までして。

くすつと笑って起き上がった。千種区のビューティーサロン・フォレストイン。行かないだろう。

ふうとためいきをつき、課長に仕事を終えた報告をし、更衣室で着替えて会社を出た。

寒い。襟元を合わせる。もう12月なのだ。

12月に入れば街中はクリスマス一色で、イルミネーションが華やかだ。

長い黒髪を一つに縛り、黒いロングコート、黒いローヒールで歩く自分が異質な気がする。

そう思いつき、浅井はくすりと笑った。

ビューティーサロン・フォレストイン。ステキな屋号の美容院ね。私は近所のおばさんが一人でやっている屋号も覚えていない美容院に半年に一度くらい、長さを揃えてもらう程度しか髪はいじらない。

先輩が好きだって言った長い髪だからね。

だからクリスマスも関係がない。楽しいイベントじゃなくなってもう10年も経つ。

特に、一生誰も愛さない！とか、独身を通す！とか、強い決意があったわけではないのだが、そういう予感があった。

あれ以上誰かを好きにはなれないだろうと思う。

それでいい。

この先ずっと一人でも困ることはない。貯金もしているし保険にも入っている。それ以上はこのご時世、考えても意味がない。

そう考えて浅井は顔を上げて改めて周囲を見回した。

それにしても年々街は華やかに賑やかになっていく気がする。ショーウィンドウの中もものすごいことになっている。

赤いミニのサンタ服を着たマネキンの周りを、本物の子犬が小さなソリを振り回して走り回っている。

噓・・・と驚いて浅井はウィンドウに近づいた。同時に

「あっ！」

と、甲高い声が聞こえた。

直後に誰かが肩に強くぶつかってきて転びそうになったが、なんとか堪えた。

が、足元でパリンと音が聞こえた。

また、あ、と甲高い声が聞こえた。そしてその声が続けた。

「・・・ごめんなさい・・・メガネ・・・踏んずけちゃった・・・」

「

少しの間、浅井は呆然とした。

裸眼の視力はほとんどないのだ。

「ごめんなさい、どうしよう・・・」

浅井の足元でメガネの残骸を拾っているらしい声が聞こえる。

「あの、スベアって持ってますか？」

「持ってきてない・・・家にはあるけど・・・」

「近くのメガネ屋さんじゃ・・・」

「だめなの。レンズが特殊だから、」

「ですよ・・・すごく厚いですよね・・・あ、あの、それじゃ、」

声が浅井の顔の高さまで登ってきた。浅井は女子としては長身なので、この子も割りと大きいのね、と思った。しかしそんなことが、声を聞かなければわからないという状況が、怖い。

見えないなんて。こんな雑踏の中でメガネを失うなんて考えたことがなかった。

一歩も歩けない。

段々本格的に恐ろしくなってくる。

これじゃ、家にまでも帰れない……。。

「コンタクトじゃだめですか？一時的にならそんなにしっかり合わなくても大丈夫って聞きました」

「私コンタクトしたことない……」

「みんな最初は初めてです！弁償しますから、使い捨てのコンタクトなら安心でしょ？」

少女は急に元気な高い声で言い、その声に腕を引かれてコンタクト屋さんに連れて行かれた。

思えば、これが全ての始まりだった。

はつきり見えない中を暖かい手に握られて人の間を縫って、明るく小さな店舗に飛び込んだ。

「いらつしやいませ」

その若い男の声を聞いて、浅井は初めてほんの少し恐れを抱いた。これまでがあまりに速い展開で言われるがままについて来てしまったが、まさか新手の詐欺？コンタクト詐欺？

「ああ、初めてですか。それでは医師の診断を受けていただかないとなりませんので、二階の眼科で行ってきて処方箋をもらってきてもらえますか？保険証はお持ちですか？」

保険証・・・保険証詐欺・・・？！

「階段が危ないですよ。ゆっくり登りますから大丈夫ですよ！」
彼女は二階の眼科まで連れて行ってくれるようだ。だけど、だ、ど、と思っっているうちに二階の眼科の扉を開けている。

「どうぞこちらに。視力測定しますね。眼底測定もしますのでね」
んん・・・、本当の眼科っぽい・・・。

「近視がかなりすすんでますし乱視もありますね。コンタクトですと、ハードとソフトと、」

「あ、あの、」

少女が口を挟んだ。

「うっかりメガネを踏んでしまって、一時的に見えればいいんです。それだと使い捨ての乱視がないのでも見えるって聞いたんですけど、」

「ああ、1日とか2週間とかのコンタクトのことですか？確かにそれで不自由はしないかと思いますが、乱視に対応したものだともた何度も使えますけど」

「いえ、今日これから家に帰るまで見えればそれでいいんです！」

んん？この子、なんでそんなこと強調してるんだ？

「ええまあそれでもお客さんが構わなければそれで対応できるかと思えますけどね」

そういつて、医者は伝票のようなものに何かを書いていた。初診代と診察代で3千円。そして下の階で購入の際に使用できるクーポン千円分もらった。

こんな商売している医者で大丈夫だろうかと思っているうちにまた階段を下りて一階店舗に入っていて、処方箋で簡単に3種類のコンタクトの箱を用意された。

色々説明されたが最後には面倒臭くなつて、一日使い捨ての一番安いものから試して、それがそう悪くなかったのでそれに即決した。うわ！となぜか少女が声を出して喜んだ。

それで、少女が浅井の斜め後ろにいて、鏡に映っていることに気付いた。初めて彼女をはつきり見た。

茶色のショートヘアを柔らかく浮かせて白い肌の頬をピンクに染め、長い睫毛に縁取られた大きな瞳を開いて、キャメルのダッフルコートを着た少女が微笑んでいた。

ありえないほどの美少女だった。まるでCGだ。

浅井は初めて対面した今まで手を引いてくれていた少女のその美しい笑顔に見惚れて、呼吸を忘れた。

そしてふと、目を正面に戻した。

真っ黒い長い髪を束ねただけの、真っ黒いコートを着たキツそうな一重の瞳のやせたおばさん。

それが私だ。

「商品はこちらのクーポンご利用ということで、この金額になります」

店員が商品と電卓を持ってきたので、浅井がバッグから財布を出そうとすると、少女が慌てて口出ししてきた。

「あー支払いはこちらでします！だってメガネ割った責任があるし！」

あ。それで安いコンタクト選んだことを喜んだのね。

浅井はその心遣いと無邪気さが嬉しくて、少し心が温かくなった。「いいわよ。あのメガネ、もう古かったしね。あなたのおかげでコンタクトも初体験できたし」

浅井はそう言いながらクレジットカードを差し出した。

「あつ！だって、それくらいだったら払えるのに！それじゃどうやってお詫びしたらいいか、・・・」

いいの。あの笑顔と困った顔とその高い声で、私本当に嬉しい時間がすごせた。こんなに可愛い子ってそうはいない。それなら、

「もう大丈夫よ。見えるから。後は一人で帰れるからあなたももう気にしないでいいわ。」

今日は金曜日だし早く行かないと彼氏が帰っちゃうんじゃないの？」

もしこの子に彼氏がいるのだとしたら、きっと来るまで何時間だつて待つだろうけど。

浅井は支払い伝票にサインを記入していたので気づかなかった。店員は見ていた。そして、固まっていた。

ボールペンを返そうとしてるのに店員が固まっているので、やつと浅井も振り向いた。

そして、驚いた。

少女の表情が一変していた。

頬を染めて上目遣いに大きく見開いていた瞳が、今はわずかに見下ろす角度に顎を上げている。

少し開けていた口も、への字に結んでいる。

「……………え？……………」

浅井が問うと同時に返事が来た。

「僕、彼氏なんていないよ」

呼吸も瞬きも忘れた。店員は口を閉めるのも忘れている。

やっと息を吸って、浅井が言った。

「・・・つまり、・・・」

「つまり僕は男です。別に構わないけどね。間違えられるのは慣れるから」

少女、ではなく少年が、浅井の声に被せるように言った。

まだ信じられずに、浅井はその姿を凝視する。

伏せた睫毛は恐ろしく長いのに、そしてその声はとても高いのに、

「スカートはいてるわけでも、化粧してるわけでもないのに、間違えられる」

赤い唇で笑みを作り、彼は続けた。ただその目は笑っていない。

そうか、笑い事じゃない。私は彼を傷つけたのだ。悪気なんかなんにもなくても、彼は傷ついたのだ。

「ご、ごめんなさいね、私ほら、メガネ割ったから見えなかったし、ね、」

「あはは。そっか。それ結局僕のせいか！」

彼の本当の笑顔になった。まるで花が咲いたように店内が明るくなる。

だからといって彼を傷つけたことに変わりはない。彼が傷ついてることに変わりはない。

「ごめんなさい、私本当にそっかしくて、」

申し訳なくて浅井は謝り続けていた。

それを聞きながら、笑顔の少年は目をくるりと回して、浅井に提

案した。

「じゃ、お詫びにこの後僕におごらせて」

何？と浅井が目を上げた。

「だってコンタクトだって弁償できなかったし、僕の立場がないよこれじゃ」

少年は笑顔を一瞬で崩して唇を尖らせた。そしてその顔もこの上なく可愛らしい。

思わず浅井も微笑んでしまった。そしてそれが了承の合図になったらしい。

少年はキャメルのダッフルコートにポケットに両手をつっ込み、また花が咲くような笑顔を見せた。

「じゃ、どこに行こうか！晩ご飯はもう食べたの？」

少年がさっそく扉を開いて外に出ようとするので、白衣の店員が慌てて浅井にレンズの箱を入れた袋を渡した。

「本日初めての装着ですので、なるべく長時間はなさらないようにしてください」

あ、はい、と答えようとする浅井と同時に少年が言った。

「お酒は大丈夫？お酒がいいね！どこにいきましょうか！」

えっ？！と浅井が少年に顔を向けると、続けて少年が言った。

「言っておくけど、僕もう成人だからね。とっくに二十歳なんだ。二十歳のベテランなんだからね」

そうは見えない、という言葉を押さえつける強調。

「四月に二十歳になったのに誰もお酒に誘ってくれないんだ。ね。お酒の店、どこか知ってる？」

くるりと回って笑顔で訊ねてきた。やはり浅井も笑顔になってしまった。

二十歳に見えないことを本人も知っているのだ。

だからと言って、ねえ。お酒を飲む権利はもう持ってるんだもんね。

しかしお酒の店ってまた大雑把なリクエストだわ。

そう考えて笑っていた浅井の顔が固まったのはその直後だ。

正面から、課長が浅井に向かって歩いてきていた。

もう灯りの消えた店舗のショウウィンドウに向かい、浅井はバサリと縛っていた髪をほどいた。

課長の姿を認めてから髪をほどこまで浅井の中ではグルグルと思考が高速回転した。

つまり、今ここでこんなに若くて可愛い男子と歩いているのはそれなりに事情があつてですね、と課長をつかまえて一から説明するか？それが弟と言おうか？いや、課長が私に弟がいないと知っている可能性は0どころか高いし、あ、じゃ、従弟！イトコつてことに！てかこんなに似てないのに信用される？ていうかそれを課長つかまえてわざわざ伝えるのか？

と考えた挙句に他人になりすまし気付かれないようにやり過ごすという原始的な手段に出ただけだった。

そして幸運にも課長に気付かれずに済んだのだが、それを見ていた少年がにつこりと微笑んだ。

「それ、かつこいいね。もうオフに切り替えるって気合入れだね！じゃあどこか知ってるお店あるんだよね？」

天使のような少年はポケットに手をつ込んで待ちきれない風に足踏みをしている。

「早くいこ！」

「そうね」

浅井も、課長が去った方向に背を向けて急いで歩き出した。当然のように少年も肩を並べて歩き出す。

「僕の名前は君島秋彦。二十歳、学生。あなたの名前は？」

ああ、本当に男の子なのね、と浅井が一度少年の顔を見ると目が合った。

「私は、」

浅井が視線を外した。

「浅井鈴乃」

そして、ふうとため息をつく。

一体私たちはどういう連れに見えるんだろう。親子ほど離れてはいないけど姉弟ほど近くもないし、第一こんなに見た目の共通点もないのに……。

「浅井さんか」。浅井さん、お酒は強い？」

自分が見た目の心配ばかりしている間、少年は酒のことばかり考えていたようだと思いき、浅井はくすりと笑った。いや、少年じゃない。青年か。

「強いわよ」

「ああ、頼もしいね！楽しみだなあ！」

ねえ、早く行こう！と青年・君島はスキップを始めた。

恋人も友達もない浅井の知っている店となると、会社の同僚に紹介された店しかない。

その中でもしやれた小さめのバーを選んだ。

照明が天井に埋め込まれた小さな電球の数々と、ガラスケースの中に積み重ねられた様々な形のグラスを下から照らすキラキラとした間接照明と、客が座っているテーブルの上に置いたキャンドルのみの薄暗い店内。

案内された席に着き、君島は溢れる笑顔を隠さず全身で喜んでい

る。

「ね！入り口で年訊かれなかったの初めてだ！」
「そうなんだ。そんなことが嬉しいのね。浅井も笑って俯いた。
「何にする？とりあえずビールってやつ？それでいい？」

浅井が頷くと君島が大声で、とりあえず生ビール二つ、と嬉し

そくにオーダーした。どうやらこれもやってみたかったことらしい。じきに運ばれてきたビールグラスで乾杯し、テーブルに置かれたキャンドルで照らし、メニユーを二人で覗き込んだ。

メニユーにはカクテルの説明も添えてあったので、それだけでしばらく盛り上がった。

盛り上がったというよりは、君島が浅井を質問責めにしたというのが正しい。

曰く、どれにする？これはどんな味？強い？これはどういう意味？なんでこんな名前？美味しい？塩がついてるの？何で？どうやって？

浅井は一つ一つ答えた。

答えながら、不思議な気がしていた。なぜ私はイライラしていないのだろう？

理由はわかっていた。彼の可愛らしい顔と無邪気な性格のせいだ。この明るい笑顔だけで自分の気持ちまで晴れてくる。

そして気付いた。誰かと楽しくお酒を飲むなんて初めてだ。

先輩とはお酒を飲めなかった。そんな年齢まで一緒にいられなかった。

初めてお酒の楽しさを教えてもらうのが、二十歳になったばかりの青年にだなんて。

浅井は笑った。少し酔ってきたようだと言った。頬杖をついた。

そしてまた君島を笑顔で眺めて、はっとした。

「君島君、だいぶ酔った・・・？」

「ぜえ〜んぜん、酔ってなあい〜！」

君島は真っ赤な顔でヘラヘラしていた。

しまった・・・！この子、ほとんどお酒の経験がないんだったわ・

・・・ちよつとどこかで醒まさなきゃ・・・。

「もう出ましょう。次にいこ」

「なんでさあゝ！僕さ、この、アレキサンダーの妹とかいうのがさゝ、」

こんな風にぐずられても浅井は笑ってしまふ。

「また今度にすればいいじゃない。今日全部飲んじゃう気？」

「今度？本当に？」

君島がうつろな目を向けてくる。それにも浅井は笑った。

その浅井の耳に、大声が響いてきた。

「あそこゝ！あそこの席がいいゝ！窓際のおゝっ！あそこにしよゝ大沢くゝん！」

浅井の笑顔が凍った。

栗尾の声だった。

嘘……。なんでこんなに早く二人が抜けてくるの……。？って、あ、もう11時？いつの間に……。

二人は浅井たちと同じく窓際の、空きテーブルを一つ挟んだテーブルに座った。栗尾が背を向けた椅子に、大沢が栗尾、君島を挟んで浅井と向き合う席に着いた。

気付かれる前に出ようと浅井は焦ったが、君島はまだポワ〜っとしている。

「ね、君島君、」

浅井の声に被せるように、酔った栗尾の大声が響いた。

「もうホントに嫌あ。あのイヤミなお局様あ」

浅井が声を失う。

「いつも私ばかりなのよお。私が一番若いからだって分かってるけどお」

……。私のことか？

「さっきのだって、ど〜考えたってお客が悪いに決まってんのにい」

……。私だ……

「自分で余計なこととしてさあ〜、仕事ができるうみたいなフリすん

のお！」

．．．ん．．．

「浅井さんは実際仕事できるよ。それはみんな認めてんじやね？」

ああ、余計なフォローしないで。大沢君．．．

「あゝ！！！！大沢君、庇うんだあゝ！あのオバサン！」

オバサン．．．

「趣味わるゝっ！！！！あのヒト絶対カレシいない歴年齢と一緒にだよ！キモっ！」

キモ．．．

浅井は俯いて頬杖をつき、ため息をついた。

その浅井を君島が半眼でじっと見ている。

「髪型一回も変えたことないって、ありえない？ずっとあの真つ黒のロングだよ？」

「先輩が好きだって言ったの。絶対変えないわ」

浅井が小さく反論した

「メガネだつてさあ！あれ一つしかないのよ！貧乏なの？ケチ？てか面倒なのよ！もう女じゃない！」

「同じのを三つ持つてるわ。先輩が選んだフレームなのよ。他は選ばないわ」

浅井も酔っているのだ。こんなことを口にするのも初めてだ。

「でも可哀想よね。女に見られないままオバサンになってしまったなんて、ホント、可哀想！」

きやはははは、と栗尾が大声で笑った。

浅井は、俯いたまま微笑んだ。

「お前さ、いいすぎだったの。そんなこと思ってたんのお前一人だよ」
いいわよ大沢君。あなたがフォローするたびにもっとひどくなる
の。そういうものよ。

もういい。私も、何バカなこと言ってるんだか・・・。

「君島君、もう、」

浅井は無理に笑みを作って、顔をあげて君島にまた言った。
それを待ってたかのように、君島が尋ねた。

「浅井さん、フェアレディZって、知ってる？」

思いがけない突然の質問だったので、浅井は反射的に頷いた。君島は真つ赤なままの笑顔で浅井を見つめ、続けた。

「ラジオで聞いた話なんだけどね、DJがど田舎ののど自慢の司会に行ったんだって」

そう言つて、彼はテーブルに目を落とした。

「自慢のZで行ったんだよ。赤いZ」

グラスから落ちた水滴を指で、テーブルに「Z」となぞった。浅井はその君島の長い睫毛に目を奪われた。

「それでね、会場の公民館に時間より早く着いちゃってね、」

私は、こんなに可愛くなかったな。浅井は、ふと笑った。

「Zをさ、適当な場所に停めて会場の下見してたの」

可愛いなんて先輩が言ってくれただけだったな。

それで充分だった。

他に何もいらなかった。

ずいぶん私は幸福だった。

ふと、君島の声が止まっていることに気付き顔を上げると、それを待っていたかのように君島が笑みを見せた。

「でね、そのZが停めてあつた場所が超ジャマな場所だね、運転手を館内放送で呼び出すことにしたの」

君島がまっすぐ浅井を見詰めたまま語るので、浅井も目をそらせずに頷いて聞いた。

「だけどその公民館にいたのがおじいちゃんばかりで、車見にいったのもおじいちゃん、放送したのもおじいちゃん」

浅井がまた頷いた。

「えー、お呼び出しもうしあげます、玄関前に停めてある、赤い、ふえあれでー乙という車でお越しの方」

滴で書かれた「Z」の最後を人差し指でピンとはねあげた。

浅井が、ぶふっ！と吹き出した。

「うっ、嘘！そんなのっ・・・！」

そう言っただけから、あはははと大声で笑ってしまった。

「あ！嘘じゃないよ！」

真剣に反論する君島も可笑しくてさらに笑った。

「ホントだよ！だって、外見ってみてよ！」

「なによ外って」

笑いながら、浅井は外の様子を見ようと顔を窓に近づけた。

「真っ暗で見えないわよ」

「見えてるよ」

「何が？」

「窓に映ってる。きれいな女の人」

「そんな、」

そして浅井にも見えた、窓に映る頬を染めて笑う長髪の女性。

「きれいでしょ。髪縛ってたときもね、きれいだと思ったんだよ」

その言葉にすぐには反応できなかった。自分のこんな笑顔を見るのは初めてだったから。

「髪を下ろすとゆるいウェーブなんだよね。それもよく似合うよ」

困る……。こういうの慣れてない……。浅井は髪をかきあげて、困っていた。

「あなたは、きれいだよ」

浅井は、笑うことにした。

「そんなこと言ってたって何にも、」

そう言って君島の方を向いた。
直後に君島が叫んだ。

「だめ！」

だめ、と叫んだ君島がぼやけていた。

なにか白いものが目前に迫ってくる。

「ごめん！僕、あなたが、」

君島の温かい手が頬に触れたようだ。

まさか

「あなたがこんなに傷ついてると思わなかった・・・！」

まさか私、

泣いてる？

浅井は驚いて自分の頬に触れてみようとして、君島にその手を握られた。

「触らないで、コンタクトは僕が取るから」
 そうか、涙でコンタクトが取れたのか。

そうか、泣いてるのか。
 そう認めたら、次々と涙が湧いてきた。

なんだろうこの涙は。

「ああ、ごめんね、このコンタクトもう使えないんだよね、」
 君島がおろおろしながらそんなまぬけなことを言う。
 可笑しくて、笑った。それでも涙は止まらない。

なんだろうこの涙。

「僕、ハンカチもティッシュも持ってないよ。このペーパーナプキンでいい？」

君島がそれを浅井の頬に当て、涙を吸い取った。
 またわずかに触れた指が温かい。

その、温かい手が、嬉しい。
 温かい視線が嬉しい。
 涙の理由なんてわかっていた。

私は寂しかったのだ。こんなにも。

「ごめんね、浅井さん、今度また飲みに行く話、ナシにしないでね！」

浅井はまた声を上げて笑ってしまった。泣きながら。

こんな涙は初めてだ。

浅井は目を押さえて、涙を収めようとした。

笑ってごまかす方法はないだろうかと考えながらも、涙は止まらない。

今は嬉しいのに、笑ってるのに、どうして止まらないんだろう。

そしてその涙も、ずいぶん気持ちがいいのだ。

君島を困らせていることも、気持ちがいいのだ。

こんな涙は初めて。

ありがとう。君島君。

浅井は笑いながら、泣きながら、そんなことを考えていた。

その時、聞き覚えのある声が浅井を呼んだ。

「あの、・・・浅井さん、ですよ？どうしたんですか？」

大沢が二人のテーブルの横に立っていた。

君島が浅井の腕を握る大沢の手を払った。

「行こう！浅井さん！」

君島が浅井の腕を掴み、早足で立ち去ろうとした。

浅井は一度大沢を振り向き、やっぱり見えない、と笑った。

大沢は一人立ち尽くしていた。

自分の腕を払った君島の力が思ったより強かったことと、浅井が最後に向けた笑顔で動けなくなった。

そんな顔するんですか、浅井さん……。

「君島君、本当は酔ってるでしょ」

「酔ってないよぉ！さっきのはさ、あいつがシツレイだったでしょ？」

「うん、まあ確かに・・・」

「ね！それにさ、僕さっき浅井さんの真似したんだよ。気付いた？」

「え？何？」

「浅井さんてさ、説明の真ん中抜かすの。最初と最後だけ言うの。知ってた？」

「そんなことない。普通よ」

「ふふふ。ホントだよ。だから相手がついてこれないの」

その後離れた場所から、浅井さん！と大沢の大声が聞こえた。

「ほらね！今気付いたんだよ僕が言ったことの意味に！」

「え？何を言ったの？」

「あいつに聞けばいい」

「浅井さん！」

大沢が追いついて、浅井をまっすぐ見て呼んだ。しかし浅井がふと気付いた。

「大沢君、あなた栗尾さんに責任あるわよね？」

「責任？！」

あははは、と君島が笑った。

「それだよ、浅井さん。間の説明を飛ばしてる。ふふ。僕会計してくるね」

君島が離れた。

「栗尾は、その、悪酔いしてるんでこれから自宅まで送っていきま
すけど、浅井さん、明日、ヒマですか？」

「・・・え？」

「そんな、今日あつたばかりのヤツと飲めるなら、俺とでも飲め
るでしょ？」

「は？」

「いつも、断るから、きっと俺が誘っても断るんだと思ってた」

「え？」

「明日。デートしよう」

「・・・ええ？」

「いいよね？」

浅井は急に不安になった。何しろはつきりとは見えてないのだ。

つい振り向いてキヤメル色を探した。

すると後ろからキヤメルが近づきながら、浅井を通り越して大沢
に言っていた。

「今さら？ていうか、失礼の上乗せだよ。浅井さんがメガネ外し
て髪下ろさなきゃキレイだって気付かなかったんだろ？」

「知ってたよ。お前よりずっと前から知ってたよ」

「ウソつけ。じゃあ、いつからだよ？」

「俺が入社した時から。だから3年前から」

「なにそれ？3年も片思いつて？バカ？今どき小学生でもやらない
よそんなの」

大沢が黙った。

「言えなかった。浅井さん、頭いいし、俺高校中退だし、誰が見た
って釣り合わないって」

「なんだそれ？」

被せるように反論したのは、浅井だった。

「知らないわよ高校中退だなんて。何よ釣り合いつて。そんなことで」

さつきまで自分が君島に釣り合わないことに不安だったせいで余計腹が立っている。

「だいたい何？頭いいつて。私は普通に仕事してそれで生計立てるだけのことよ」

そして酔っているせいで、思考がずれていく。

「だけどそれじゃダメなんでしょ？さつき言つてたのはそういうことなんでしょ？」

「いや、俺は何にも、」

「ファッションやアクセサリーにお金かけないのはまともじゃないつて言うなら、まともじゃなくてもいいわよ」

「あの」

「私は一人で困らないようにずっと頑張つてやってきたしこれからもやっていくの。だから全然困らないの」

ふふ、と隣で君島が笑った。

「これまでだつてずっと一人でやってきたんだし、これからだつてずっと一人で、」

君島の指がまた頬をなでたので言葉が途切れた。

その動作で、浅井はまた自分が泣いていることに気付いた。
噓。

今度は何の涙だつていうの。

浅井は自分で自分がわからなくなってしまった。

「だけどこいつは、浅井さんを見てたんだってさ」

君島が浅井の右手を取った。

「で、今も見てるだけかよ」

そしてその手を、大沢に渡した。

「今まで苦しかったのも全部こいつのせいだから、目一杯嫌がらせしてやったらいいよ」

輪郭のぼやけたキャメルが浅井から離れていくのが分かった。

「え？君島くん、どこ行くの？」

浅井は慌てて言う。

「僕はさ、キューピッドだったね」

コンタクトショップで見た君島の姿が思い浮かんだ。

キャメルのダッフルコートをふわりとゆらして笑う、まるで冬の天使のような。

「そいつに送ってもらって。3年も待たせたんだからタクシー代くらいだしてくれるよ」

君島の足音がする。

「だって、また飲みに行こうって、」

その天使が消えてしまう気がして、追いかけてよとした。

「うん。また行こう」

大沢に腕をつかまれていて進めない。

「また会えるよ。きっとね」

輪郭のぼやけたキャメルの天使はそう言って、ドアを開けて消えた。

一度止まっていたのに、浅井の涙がまた溢れた。

会ったばかりの天使のような可愛い男の子。

その姿だけでその視線だけで、そしてその言葉で自分がどんなに

救われたか、

わずか数時間がどんなに貴重だったか、浅井は自分の胸の痛みで知った。

今までこんな気持ちで泣いたことはなかった。

今度は大沢が浅井の頬の涙を拭う。

「あの子にもう、会えないのかなあ・・・」

泣きながら浅井が呟く。

「俺がいてもだめですか？」

大沢が言った。

泣き顔で大沢を見上げる。

すると大沢は、浅井の頭を撫でた。

「すいません・・・浅井さん、可愛いですね。泣いてるから、子供みたいだ」

それが優しい笑い声で、頭に置かれているのが大きな手で、浅井も自分が子供のように思えた。

「会えると思いますよ。俺は会いたくないけど」

泣いてるのに笑えてきて、浅井は下を向いた。そうね。きっとまた会える。

大沢くんのこととはよく知らない。これからいろいろ訊いてみよう。多分この大きな手は私を傷つけない。キャメルの天使が認めたのならそうだろう。

私にはそれが重要だ。あの子がキューピッドなら、とりあえず従うわ。

違ってたら、・・・そうだ。どんな手使っても探し出して、文句の一つも言ってやる。

「20歳・学生・君島秋彦」

多分これで探せる。きっと。そう考えて、浅井は安心した。

そして気付いた。

「私・・・コンタクト取れちゃって、今何も見えないのよ。・・・
どうやって帰ろう・・・？」

大沢と浅井が酔いつぶれた栗尾の腕を両側から支えてタクシーに乗り込み、自宅まで送り届けてから浅井のアパートに向かった。

思いがけず訪れた幸運に大沢はすっかり浮かれていたのだが、

「あれ？大沢君ってこの前まで南営業所の三島さんときあってたわよね？」

という浅井の突っ込みにうろたえた。

入社当初から浅井に憧れていたのは本当だった。

しかし当時20歳だった大沢にとって5年の年齢差はただでさえ大きく、そして浅井とはそれ以上の差を感じていた。

壁がある、というか、バリエーを張っている。浅井にはそういうイメージがあった。

なんとか、どこかからそのバリエーを破って、または破れ目から忍び込んで、という気持ちで今日も会社で声を掛けてみた。

それも結局空振りだったのだが。

その気持ちと、休日や空いてる時間を特定の女性と一緒に過ごすことは、大沢にとっては別だった。

「あ、あの、三島とは付き合っていないっていうか、俺断ったんですけど、向こうはそう取らなかったっていうか、いや、やっぱり付き合っていないかったです。今はあいつちゃんと男いますし、俺は、」
そこで大沢は絶句した。続ける言葉が見つからない。

大沢にとってこれまで恋愛とはここまで緊張を伴うものではなかった。

自分から告白したことは一度もない。しかし相手に不自由したことも一度もない。

つまり自分から行動したのは今回が初めてで、さっきの小僧の言う通りに小学生のように緊張している。

「そういう意味では、俺は今までちゃんと付き合ったことなんかないです」

俯いて額を掻きながら、小さな声で言った。

え？と浅井が訊き返したが、大沢は答えず、代わりに質問を返した。

「浅井さんは前に付き合った人はいるんですか？」

浅井はすつと視線を外して目を伏せ、すぐにまた大沢の目に視線を戻し、瞬きもせずに答えた。

「内緒」

大沢の目を射るように見つめたあとに、また浅井は目を伏せた。

内緒。

いない、とクールに即答すると思っていたので、大沢はその反応に戸惑った。

イエスかノーで答えられる質問に対する答えが、内緒。

そんな曖昧な答えを言った浅井の目には、なにか強い意志が見える。

助手席のシートを見ているようで見ていない瞳の奥に見えるのは何だろう。

多分、決意。

決意・・・？

一歩踏み込んだバリヤーの内部に、まだ何重もバリヤーが囲っている。

結局大沢のイメージをそんなふうにならして、浅井がタクシーを降りて行った。

タクシーを降りて大沢に手を振り、浅井は階段を上がってドアの鍵を開けて灯りをつけた。

メガネもコンタクトもないのでぼんやりとしているが、今朝出てきたままのシンプルな2DK。

長年住んでいるので、何歩でドレッサー代わりの棚に辿り着くか知っている。

その引き出しを開けて、予備のメガネを取り出した。

これも先輩が選んだあのフレームと同じもの。

先輩を失ったのは10年前。

実家と縁を切り、大学もやめて、先輩と過ごした街で仕事をみつけて、ただ生きてきた。

それで精一杯だったし、死ぬまでそれが精一杯だろうと思っていた。

それなのに天使に出会い、自分を見ていた目を教えられ、そしてそれに心を動かされた。

それを嬉しいと思うことを、先輩に対する裏切りだとは浅井は思わなかった。

毎日健康に生きていることが既に裏切りだと、10年間思い続け

てきているから。

翌朝早く、大沢が浅井の部屋の前に立った。

チャイムを鳴らし、ドアが開けられ、

現れた浅井を見て大沢は用意していた挨拶を飲み込んだ。

浅井は昨夜のようにメガネを外して、長い黒髪をほどいて流している。

黒のショートコートが白い肌を強調し、細身の長身はモデルのようだ。

見惚れてぼんやりしている大沢に、浅井が首を傾げながら行き先を尋ねると

「どこでもいいですよ」

と最も困る答えを返された。しかしまあ予測範囲内。

「朝だし、モーニング食べながら考えようか」

はい！と大沢が喜んだ。

大柄な大沢の車は紺のRV。

ただでさえ車に乗ることがめつたにない浅井にとって、こんな背の高い車は見たことはある程度の認識しかない。

乗って、と言いながら軽く運転席に乗り込んだ大沢の動作を見て、あ、ドアを開けてあそこを掴んで、と学習したものの、ステップに乘せる足を間違えて考え込んだりした。

大沢がそれをじっと笑いを堪えてみているので、浅井はちょっと睨んだ。

「怒らないでください」

とやはり大沢が笑った。

「どの方面に向かいます？」

「街にしようか？とりあえず街中の駐車場に停められたら後が楽よね？」

「はい。じゃ、栄方面に？」

「はい」

そして車は出発した。

車を運転しないので、浅井は車道の真ん中を走っているのが怖い。

「免許あるんですか？」

「あるけど、ペーパー」

「車乗る気はないんですか？」

「うん。車買って持つお金もなかったし、車なくても困らないし・・・」

「そんなもんすかねえ。じゃあ、困ったら俺に言ってくれば、買い物ぐらい付き合います」

車道が怖いのでずっと窓から外を見ていた浅井は、ちらりと大沢を見上げた。

気付いた大沢が顔を向けたので、ありがと、と笑った。
すると大沢が照れて頷いた。

多少朝が早くても、モーニング文化の発達した地域なので喫茶店は山のようにある。

いつも満車の街中の駐車場が空いていたので、そこに停めて二人でうろつろと探した。

「この3階の店、満腹モーニングって書いてます」

「満腹？そんなに食べる？」

「俺は食べますけど。浅井さんは？」

「私、朝無理。でも大沢君食べるなら私のも上げるし」

「え・・・。それじゃ満腹モーニングじゃ多過ぎるかな」

そしてその上の階の、自然派モーニングの店のドアを開けた。

メニューを見て、自然派じゃ足りなかったかなあと大沢が呟いた

ので、また後で別のところで食べたらいいじゃない、お昼に混む前の方がいいし、と浅井が笑った。

大沢もまた笑って頷き、じゃ次の店探しましようtown誌を持ってきた。

そのtown誌の新譜紹介ページで大沢が手を止め、このCD欲しい、と呟き、え？それ？私それじゃなくて、今度出るケミカルが欲しいの、と浅井が言った。

趣味近いみたいですね。じゃ、このあとCD屋に行ってみます？と、予定が決まった。

昼間でもクリスマスモードの街は煌びやかで、店の大きなウィンドウの前に鮮やかなポインセチアが並べられ、白いシクラメンもそれに沿い、濃い緑がそれを縁取る。

歩く人々も楽しげで、隣を歩く大沢も楽しげで、クリスマスマジックなのかなあと浅井は分析している。

分析中に気付いたが、通り過ぎる女子がほとんど大沢に振り向く。派手なブルゾンにゆったり目のブルージーンズ、長身小顔で短い茶髪。

ぱつと目で目立つ上に、じっくり顔を覗き込んでも黒目がちの整った童顔。

そうだった。大沢君は、事務所人気筆頭イケメンだった。その筆頭イケメンは、楽しげに延々と浅井に話しかけている。

浅井さん、歩くの速いっすよね。

いつもCDで買うんですか？

てか、トランス以外は何聴くんです？

浅井も考え事をしながらも、質問には次々と答えて、ビル8階にあるCDショップを目指した。

その二人を、会社の同僚事務員二人が見ていた。

やはり目立つ大沢に気付いて、声を掛けようと走り寄ってから女連れに気付く、

あら、やだ、大沢くんってフリーだったはずなのにどうして？誰あれ？

とその後をつけた。

身長はお似合いのサイズだけど、モデルみたいなスタイルだけど、かなりのロングヘアだけど真っ黒よね、きつとそのせいで顔も白く見えるし小さく見えるけど、でもほら全体的に地味な感じね。

と小姑のように判定した連れの女が浅井だと気付いたのは、昼前に喫茶店に入ってからだ。

テーブル一つ離れた場所を選び、二人の会話に聞き耳を立てていた時に、大沢が大きな声で相手の名前を呼んだのだ。

「え！浅井さん、ダフトパンク持ってたの？！」

事務員は、グラスを持つ手を離してしまった。ゴンと鳴ってジュースが少し零れた。

もう一人の事務員は、俯いて固まった。

しばらく無言のまま固まった後、二人はゆっくり目当てのテーブルの方を覗き見た。

そう言われればあの長身はまさにお局サイズ。

あれにメガネをかけて髪を縛れば、・・・・・・

そうなの？今ちよつと想像できないんだけど、そうなのね？きつと？

でもたつたそれだけで、メガネと髪だけで、人ってそんなに変わるもの？

事務員はその衝撃を受け入れるだけで疲労困憊し、食事を終えて出て行った二人をさらに追う気力を失っていた。

ただ、目ではそれを追っていた。

大沢が会計をして、浅井がそれを先に店外に出て待っている。

正にカップルですね。デート中のカップルですよ。

長い黒髪が風になびいて、細い指でそれを押さえている。ただそれだけの仕草が、モデル体型のせいか美しく決まって見える。

事務員たちは、それを目の当たりにするだけで脱力していた。

そのモデルのような浅井の元に、天使のような少年が駆け寄ってその腕を引いたのを見ても、

ああ、似合うんじゃない？

と、頷いた。

驚くのに疲れたのだ。

「や！また会えたね！」

白いダウンジャケットを着た君島が浅井の腕を取った。

「へ？君島君？！」

「秋ちゃんって呼んで」

突然の出来事で、浅井はあっけにとられている。

大沢が出てくるのを待ちながら、周囲をぐるりと眺めていて、ダイナミックなランニングフォームで逃走している白い人がいるな、とは思っていた。

それが予想以上の速度で、浅井の腕を掴む直前までそれが君島だとはわからなかった。

「え？君、・・・秋ちゃん？」

「うん！待った？」

「へ？」

そして、君島を追ってきた中年の男女が息を切らして、声が届く距離まで追いついた。

「まて！小僧！」

君島がぐると半回転して、浅井の陰に隠れた。

へ？とまた浅井が君島を見た。

「あんだ、この、小僧の、なんだ？」

中年の男が浅井に訊いてきた。

話しかけられたことに驚いたが、それ以上にその口のきき方が不快だったので答えなかった。

「あんだ一体、この小僧と、どういう関係なんですか！」
激しい息遣いの合間に怒鳴られる。

君島が苦笑して、浅井の前に出て男と応対しようとしたが、浅井がそれを右手で断って、言った。

「あなたに答える義務はないでしょ」

男が、なにを！とまた怒鳴りかけたが、女が男の袖を引いた。

「みつともないことやめてよ！普通のカップルじゃないの！何考えてんのあんたは！

私買い物に來ただけだって言ってるでしょ！」

「ふざけんなよ！この小僧前にも見たぞ！」

「私はないわよ。ごめんなさいね、お兄さん」

「いえ。いい運動になりました」

君島がにこりと答えた。

なにを！とまた一歩踏み出そうとした男を、浅井が睨んだ。

「邪魔しないで下さい」

君島を睨み続ける男を、女が引つ張って行った。

はあく、と君島が、荷物を降ろしたように肩を落とし、ため息をついた。

「何？今の」

「聞かない方がいいよ」

浅井の簡単な問いに笑って君島が即答した。

「そついえば昨日の彼氏は？もしかして今デート中？」

顔をしかめたまま浅井が頷くと、え、本当？僕がいちゃまずいね、と立ち去ろうとした。

「ちよつと待つて。携帯ぐらい教えてよ」

君島がまた苦笑して、電話を取り出し、簡単に番号交換をして、じゃ、と右手を上げて走り去った。

「携帯なんか出して、どうしたの？」

直後に大沢が店を出てきた。

「うん。イタ電。ごちそうさまでした」

「あ、はい。いえ。イタ電って多いんですか？」

「ううん。そうでもないよ。大丈夫。あの、大沢君って、赤が好きなの？」

「は？」

「ブルゾン、派手な赤だし。結構赤系が多いよね？」

「ああ、そうかな。はっきりした色だから」

「黒は？」

「浅井さん黒多いっすよね」

「無難な感じだし」

よし、ごまかした。と浅井は頷いた。

帰りの車の中で浅井はクリスマスの予定を訊かれた。

訊かれるまでもなくこれまでクリスマスにイベントがあったことがないので、首を振った。

「じゃ、空けといてください」

大沢に真っ直ぐ見つめられて反射的に頷くと、大沢も満足気に頷いた。そして俯いたまま続けた。

「俺、本当に、本気です」

運転する大沢をじっと眺めた。

きれいな横顔だ。

どうしてこの子が私を・・・？

入社した時からって言うてたけれど・・・。

今でも若いけど入社した時は20歳。

その頃からもちろんこのきれいな顔だったのだけれど、

その頃から私を見ていたというのは一体どういうことだろう？

「大沢君、私、あなたが入社した時って何かしたっけ？」

「は？」

「だって、うちの事務員ってたくさんいるし、私って目立たない方だと思っただけ」

「あ、俺が、その、昨日の話ですか？」

「うん。あれ？でたらめだった？」

「いや、まさか。てか、やっぱり浅井さん覚えてないんすか」

「え？」

「俺入社して一発目で搬入ミスやったんですよ。そのフォローを浅井さんにしてもらった」

「んん？だって、それが私の仕事だし」

「そう。あの時もそう言った。俺が社長に怒られて謝りに言った時」
「だってそうなもの」

「いや、それどころかフォローしたことも忘れてたんだよ」

「え」

「お礼言ってんのに、何のこと？とか言って」

「あ、ごめん。忘れっぽいから」

「そう、それもあの時聞いた」

「それで？」

「それだけ」

「え？それだけ？ミスのフォローしただけ？」

浅井が疑わしげに大沢を見上げた。

「そうです」

「ごめん、新人君の仕事なのにね。忘れてた。」

浅井はそう言っただけで笑った。

その笑顔が美しかった。

大沢が見た浅井の初めての表情は、笑顔だったのだ。

あれ以来ほとんど見ることはなかった表情を、大沢はずっと忘れなかった。

そして、それ以上の表情を昨夜見せられた。

それは結構ショックだったが、その勢いで今日があるのだし、今

日一日ずいぶん楽しかった。

クリスマスの予約もとれた。

少しずつ、これからだ。

夕方に部屋まで送ってもらい、手を振って別れた。

一人暮らしで週末は家事もたまっているので夕食までは一緒には

しなかった。

翌日曜日も洗濯をしたり布団を干したり、一日家事に追われる予定。

大沢と街を歩いて一緒に過ごすのは、悪くなかった。

会話も楽しいし疲れなかった。

やはり、私を好きだと言うのが今一よくわからないけど、まあそういうこともあるのかなあ。

急に始まったことなので浅井自身まだよく自分の気持ちもつかめていない。

多分、これから少しずつなんだろうな。

浅井もそう考えていた。

「何それ？嘘でしょ？本当に大沢君だった？」

「大沢君は絶対大沢君だったんだけど、」

「なによ、浅井さんじゃなかったの？」

「それが・・・浅井さんだったのよ。だったんだけど、」

「何なのよ！はつきり言いなさいよ！」

月曜日の事務所でのトップニュース。

一番大きな声を上げたのが栗尾だった。

それはそうだろう。金曜日の夜は栗尾が大沢を独占していたのだ。それがその翌日には浅井に盗られたとなると、よく考えればみっともないことだ。

しかも栗尾には金曜の夜の後半の記憶がないので何があったか皆目見当がつかない。

「だって、メガネ外して髪も下ろしてたから全然印象が違ってて、でもよくよく見るとやっぱり浅井さんだったのよ」

「そんなに変わるかなあ？」

「それから、それだけじゃなくて、すっごい可愛い男の子に抱きつかれてた」

「え！」

「女の子みたいな男の子で、もうすっごい可愛い子で、なんかもう浅井さんもやせててスタイルいいからすっごいお似合いで、とにかく大沢君ともお似合いで、あたしもう疲れちゃって・・・」

「何言ってるの？」

「本当なのよ。私も疲れちゃったの。見ればわかるわよ」

「ね。疲れたよね」

昨日二人を見た事務員二人が顔を合わせて頷いた。

嫌だわ、と栗尾は自分の机に戻り、ネイルのデコを撫でる。
クリスマスまでに大沢と付き合おうと思っているのに邪魔が入っ
た。

でもまだ時間はあるから大丈夫。

これまで一人でクリスマスを過ごしたことはないの。
だから今年も大丈夫。

栗尾には自信があった。

噂がすっかり膨らみきった水曜日、大沢が昼に本社事務所に顔を出した。

まだバレていないと思っている浅井は大沢に目もくれなかったのだが、事務所内の全員が二人に注目していた。

そして栗尾は何も知らない素振りですいつも以上に馴れ馴れしく大沢に話しかけた。

「大沢君、お昼どうする？またあそこに行こうか？」

精一杯浅井に挑戦的なセリフを言ったつもりだが、浅井は反応しない。

いや、弁当買って帰るよ、と大沢が答えると、じゃ一緒にコンビニ行こうね！と高い声を出した。

しかし浅井もコンビニに行くので一緒になる。

普通に財布を持って、他の事務員たちも一緒にエレベータに乗り込んだ。

ビルの前の幹線道路は中々信号が変わらない。

大沢にへばりつく栗尾から離れた場所で浅井は信号が変わるのを待っていた。

やっと大通り側の歩道の信号が点滅を始めた。

そしてその時、急ブレーキの音と「ギャン」という金属音に似た音が重なって聞こえた。

急停止しかけた車は再び速度を上げて交差点を通り過ぎた。

しかし歩道にいた全員は、その車が急停止しようとした場所に反射的に目を向けた。

後続車が、小さな塊を避けたり避けきれずにタイヤで踏んだ。

「ネコ?!」

「嘘!」

「やだあ!」

信号が黄色になり、避けもせずにアクセルを踏む車も通り過ぎる。栗尾が悲鳴を上げて大沢に抱きついていた。

大沢は焦って体を離そうとしていたが、浅井は気付きもしなかった。

ほんの目の前で起こっている惨劇を、自分は見ていることしかできない。

何かできることがないのか考えてもまるで思いつかず、かといって目を伏せることもできない。

せめて早く車が停まって欲しい。でも停まったところで、自分に何ができる。

どうしたらいいのかわからない。多分何もできない。

浅井はそんな無力感と絶望感に苛まれていた。

車が速度を増す中、大きなライムグリーンのバイクだけが車間を広げ、ライダーが上体を起こしてヘルメットのシールドを上げた。

そして後ろを振り返り左手を横に伸ばして手の平を向け、後続車に速度を落とすように合図した。

停止線まではまだ距離がある。

後続車はクラクションを鳴らして抗議したが、バイクは構わず停止し、左足でスタンドを出してから両足を下ろした。

グローブを脱ぎ、タンクバッグを開けて中からレジ袋やタオル、ティッシュを取り出し、ヘルメットを被ったままバイクから離れ、

かつてネコだった肉の塊の前に膝をついた。

後続車はクラクションを鳴らすのを止めた。

ネコにタオルを被せ、そのまま拭うように拾い上げてレジ袋に入れた。

自分の手もティッシュで拭き、それも一緒に別の袋に入れてきつく縛り、立ち上がってバイクに戻る。

相当長身の男だった。

ネコの入った袋をタンクバックに入れて後続車に頭を下げてからバイクに跨りグローブを嵌め、何事もなかったように走り去った。

信号は再び青になっていた。

「すごい……」

「あざやか……」

結局全員、信号で渡らずに一部始終を見ていた。

浅井も口を開けてみていた。そして、小さく、すごい、と呟いていた。

大沢がそれに気付いていた。

「今のつて、ジガーレイのバーテンじゃない？」

「え？あのオカマ？」

「違うつて！あんなオヤジじゃなくて、学生のバイト君がいるじゃん？」

「ああ！あの超でつかい？」

「そうね、今の子超でつかったしね」

「ジガーレイ？」

浅井が思わず訊ねると、若い同僚が勢い込んで教えてくれた。

「そうです！ちっちゃいカクテルバーなんですけど、店長がオカマっぽいんですけど、ほかのバーテンが結構イケメンで、さっきのバイクの子も多分そうなんですよ！おまけにあの子つて、名大生なんですつて！」

「へ……。詳しいのね」

「やだ！私じゃなくて香子があそこばかり通ってるから、付き合いですよ」

「あ、なによ、紗絵がああのバーテン狙いなんですよ！」

「違うわよ！どうせカクテル飲むならイケメン見ながらっと思ってるだけよ！」

「嘘！あんたつてあのバーテンにばかりオーダーするじゃない！」

「あの子のシェイクが一番上手なの！」

「何やらしいこと言ってるの！」

「えゝ！意味わかんないんだけどっ！」

思わず吹きだしたが、信号が変わったので浅井は横断歩道に足を踏み出した。

その時に後ろから大沢の声が聞こえた。

「戻るわ」

浅井が振り向くと、大沢は踵を返してビルに向かっていて、どうしたのよ！と栗尾が呼びかけていた。

どうしたのかな、と思いつつ、浅井はそのままコンビニに向かった。

会社帰りに浅井は、赤の毛糸と編み物の本を買った。

クリスマスまではそう時間がないので、マフラーくらいしか編めないだろうと思う。

昔から編み物は好きなので、当分これに掛かりきりだと思うだけで嬉しかった。

そして一人で街を歩きながら、君島のことを思い出していた。

携帯の番号を訊きだした日に、帰ってからすぐに電話したのだ。

しかし取ってもらえなかった。次の日も。その次の日も。そして今日もこれから掛けようと思っている。

というか、掛けなおしてよ、と思っている。

そう思っていたその時、携帯が鳴った。

歩きながらしゃべるのが苦手なので、歩道の隅に寄って立ち止まり通話ボタンを押して耳に当てた。

すると後ろから、「もしもし」と聞こえた。

笑って振り返ると、予想通り君島が右手を上げて立っていた。

「何度も電話したのよ！」

「うん。知ってる。何度も電話もらったよ」

今日も白いダウンジャケット。相変わらず天使のように輝く笑顔だ。

「なんだかよく会うわよね。もしかしたら今まででもよくすれ違ってたのかしら？」

「それはないよ」

君島が浅井の腕をとり、歩き出した。

「だって最初に会ったのがこのあたりだったから、ここで待ってた

「あなたに会えるってわかってたし」

浅井がちらりと君島を見た。

「あら。待ち伏せしてた？」

ふふ、と君島が笑った。

「してない。たまたま通りかかったら、あなたがたまたま歩いてたから電話したの」

「そう。じゃあ私たちは相性もいいのかもね」

「そうだね。結構運命的な出会いかも知れないね」

笑いながらふざけた会話を続けていたが、それをまたしても同僚事務員が聞き耳を立てていた。

それに気付かず、二人は近くの喫茶店のドアを開けた。

「それで、この前のはどういうこと？」

この後予定があつて食事をするほど時間がないという君島に、まず一番訊きたいことを切り出した。

「あの追いかけてきたおじさんは？」

君島はコーヒークップに口をつけたまま、浅井を見上げた。

可愛い顔してブラックなのか、と浅井は首を傾げてシュガーポットを開けた。

「教えないよ。内緒」

カップを置いて君島が答えた。

「内緒つて。あのおじさん、真剣に走つてたわよ」

「僕も真剣に走つたよ」

砂糖もミルクも入れてかきまわしながら、顔を上げた。

「あの感じだと、あなた、あのおさんの浮気相手とか？」

冗談のつもりで笑いながら言つた。

君島は、何の反応もせずに、ただ浅井を見つめた。

「それと、間違われたとか・・・？」

君島は、にやりと笑つた。

「何？その笑いは？」

「うん。まあ、あれじゃごまかしようがないよね。正解」

浅井が絶句した。

「だから内緒つて言つたのにな」

君島はやはり笑つていた。

「なっ、なんで、人の奥さんなんか、あ、あの、出会つのが遅かつ

たつてやつ？」

思わず顔を近づけて小さな声で訊いた。

君島はフフと笑う。目を伏せると長い睫毛がお人形のような。

こんな可愛らしい子が、不倫？！

あのおばさんはどんな顔だっただろう。思い出せない。思い出せないくらい凡庸な外見だった。

どうしてそんなおばさんとこの天使のような子が、

浅井が顔を顰めて考えていると、君島が軽く答えた。

「そんなんじゃないよ。」

それに相手はあの人だけじゃないしね」

浅井は、絶句の上に息も止めてしまった。

「気にしないで。僕も相手も本気じゃないんだし」

君島は笑って手をひらひらと振った。

「お互い便利に使ってるだけなんだ」

浅井が首を振った。

「どうして、そんな、」

「うん。楽だから」

「楽、だなんて、そんなはずないじゃない」

「ううん」

君島が一息ついて答えた。

「誰も束縛しないから、楽なんだ」

その言葉を少し考えた。束縛しないから楽。しかしすぐ考えるのを止めた。

「楽でもなんでも、そんなことなんにもいいことなんかないんだから、絶対やめなさい！」

君島はまた天使のように微笑んだ。

「僕のことなんか心配してるヒマないでしょ？もうすぐクリスマスなのに」

「ごまかす気なの？」

「だって僕、クリスマスの予定がないんだよ。浅井さんはあの彼氏と？」

「え、そうだけど」

「いいね。その袋は何かプレゼントなの？」

あっさりと話題を逸らされた。

そして君島が浅井の買った文庫本に興味を示したので、

どうせマフラーを編み終わるまで読まないのので貸すことにした。

それを少し離れたテーブルで、事務員が聞き耳を立てていた。さすがに内容までは聞き取れず、二人でコーヒーを飲んでいたことを確認できただけだ。

そしてそれはその夜には栗尾に報告されていた。

夜に、大沢から浅井に電話が入る。

会うようになってから、つまり先週の土曜日から、毎晩定時に電話が入るようになった。

明日は忘年会ですね。

そうね、そっちはみなさん参加？

うん。社長も。本社は社長参加？

社長は確か出張じゃなかったかなあ。

そうなんだ。俺本社の社長つてみたことないかも。

そうね。私も何ヶ月も見えてない気がする。

いや、そんな忘年会よりさ、クリスマスですよ。

え？

え？忘れてんの？

忘れてないけど、そういえば詳しい予定は決めてないじゃない？

ああ、大丈夫です。俺が決めてます。

へえ。どんなの？

内緒です。

内緒？

あ、でもそんなに期待しないでください。

毎晩電話で会話しながら、避けている話題があった。

大沢はあのバイクの男。浅井は君島のこと。

金曜日の夜は本社上げての忘年会が開催され、下請け業者もほとんどが参加した。

大沢も出席したのだが、くじ引きの席が栗尾の隣だったのでまたしても栗尾に独占された。

同じく参加していた浅井もさすがにそれは気にはなったのだが、まさか文句を言うわけにもいかない。

それに、この場でこの前のように二人で話してもきつと盛り上がらないだろうし。

そんなふうを考えて浅井はなんとか納得する。

居酒屋での一次会が盛況に終わり、年配の上司たちと共にいつもなら浅井はここで離脱するのだが、

次はみんなでジガーレイに行くんですけど、浅井さんも行きませんか？

と、同僚に誘われていてぐらついていた。

「ほら、この前のバイクの！覚えてないですか？」

と言われるまでもなく、浅井はジガーレイと言う単語もしっかり記憶していた。

まだ早いですし！行きましよう行きましよう！と腕をとられ、しょうがないわね、と了承した。

「あ。やっぱ浅井さん、行くんだ」

栗尾が大沢に聞こえるように呟いた。

「見かけによらず、浅井さんってすごいよね」

呆れたように首を傾げて笑ってみせた。

「すごい若い子と、最近毎日会ってるんだって。なんか、子供みたいな子？それなのに次はバーテンなのね。物足りないのかな？」
「知るかよ」

面白くない大沢は、はき捨てるように答えた。

「多分、名大つてとこがツボだったのね。おばさんは若さと学歴にこだわるの！」

栗尾は大沢の学歴コンプレックスをよく知っていた。

人の弱味を探り当てる能力は天性のものがある。

そしてそれだけではなく、興信所の探偵と付き合いがあり、頼めば軽く調査してくれる。

その探偵によれば、大沢の周囲は結構高学歴の人が多く、大沢だけがぼつんと高卒の資格すら持たない。コンプレックスを持たざるを得ない環境にいるのだ。

そして、軽く浅井の調査も済んでいた。

浅井は大沢のコンプレックスを充分刺激する経歴を持っていた。

すごい若い、子供みたいな子、とは多分、あの時の小僧だろう。
大沢はいらいらしていた。

あの時の小僧と会うのはしょうがない。

腹は立つが、ある意味あの小僧が実際俺たちのキューピッドだった。それは認める。

それだけのことなら会うのはしょうがない。

しかし、この後のバーは、余計だろ。

あのバーテンは、余計だろ？

ただ見かけただけの男に興味持つの？浅井さん。

大沢はそんなふうに、いらいらしていた。

しばらく歩いて到着したのは、繁華街から少し離れた街角の小さな軒屋。中のライトが暗いせいかな窓が琥珀色に見える。

ドアを開けると暗い店内に小さく鈴が鳴る。いらっしやいませ、と確かに中々の男前が案内に来た。

「カウンターに行きましょうよ！」

と突然後ろから栗尾が浅井の腕を掴んで、ぐいぐいと進んでいった。

浅井は少し戸惑ったが、きっと酔っているんだろうな、と齒向かわずについていった。

大沢もその後ろを追った。

店が小さいせいもあるのか、結構混んでいて席がそんなに空いてない。

ダーツのコーナーもあり、椅子のないスタンド席もあるので立っていてもいいようだ。

カウンターは2席しか空いていない。大沢があぶれた。

浅井もさすがにこの席を大沢に譲る気はなかった。そこまでお人よしじゃない。

一次会で大沢が栗尾とずっとしゃべっていたことが、やはり浅井は面白くなかった。

この店にきてまでそんな姿を見せられなくてもいいでしょ。

浅井はそう思っていた。

大沢も腹を立てている。

そんなにカウンターがいいのか？俺を立たせたままでも？

大沢は少し酔っていて、いらいらしていて、よく考えれば浅井に

原因はないのに、腹を立てていた。
そして少し位置が高いスタンドテーブルに腕を乗せて、目当てのバーテンを探した。

カウンターの中には店員が二人いて、一人は接客中。

一人は横の作業台でオレンジを切っているところ。

そのオレンジを切っているメガネの店員が、かなりの長身だった。
恐らく、彼。

切ったオレンジをグラスの口に差し、トレーに載せてフロアから戻ってきたイケメンに渡した。

それから新たな客3人の顔を確かめるように眺め、

「ご注文は？」

と言った。

低い、掠れた声だ。

「私、スクリュードライバー！」

栗尾が、ついさっき彼がオレンジを差したカクテルを簡単に頼む。

「ホワイトレディ」

浅井もいつもの好みを口にする。

大沢が口を開かなかった。

「お客様は？」

バーテンが催促した。大沢はしばらくバーテンを睨んでから、言
った。

「ビール」

「バド、クアーズ、ハイネケン」

「クアーズ」

「はい」

バーテンが頷いた。

バーテンは作業時間の短いメニューから用意した。

まずビール、次にステアカクテルのスクリュードライバー、最後に浅井のホワイトレディ。

材料をシェイカーに入れて上部を合わせて蓋をし、両手で持ち上げたところで栗尾が質問した。

「バーテンさんって、名大の生徒さん？」

バーテンは長い指を広げて俯いたまま上目遣いで栗尾を見て、

「そうです」

と頷いた。

わゝ、すごい、何部なの？と更に訊き出そうとするが、バーテンは作業中は口を開かないし、結構くるくると細かい仕事も忙しそうにこなしているのではば無視している。

大沢は敵意丸出しでバーテンを睨んでいた。

頭がよくて顔も声もいい。背も高い。もてるだろう。あのバイクはいいアイテムだ。

さらにいらいらを増していた。

浅井も、バーテンを観察していた。

手先が器用で動きにそつがない。

端正な顔立ちが冷淡に見えるのは切れ長のつり目のせいだろう。

少し長めの黒髪がメガネに掛かっている。

そして恐ろしく、寡黙だな。

浅井は笑っていた。

バーテンがホワイトレディを作り終えて浅井の前にコースターと一緒に置く瞬間を目掛けて

再び栗尾が訊いた。

「バーテンさん、専攻は？」

バーテンがまた、栗尾をちらりと見て答えた。

「工学部です」

栗尾が笑って、浅井を振り向き、大きな声を出した。

「えー！奇遇ですねー浅井さん！

浅井さんと同じ、名大工学部ですって！」

「名大・・・？」

大沢が、囁きのような掠れた声で繰り返した。
隣で顔色を失って呆然としている浅井を覗き込んで、栗尾が笑った。

「そう言っていましたよね？浅井さん」

言っていない。

履歴書にも書かなかった。

それをなぜ

「まじで？」

大沢が硬い作り笑顔で浅井に訊いた。

浅井はその顔も見ずに俯いていた。

思い出したくない。

話題にされたくない。

だから隠していた。

誰にも知られていないはずなのに。

笑ってごまかすタイミングも逸した浅井は、それでもなんとか笑みを作り、首を振りながら椅子から降りた。

やっぱり私は場違いだったわね、という顔で財布から一枚札を出してカウンターに置いて去ろうとした。

直後に大沢の声がした。

「あんたさ、この前死んだネコ始末しただろ？」

周囲がシンと静まった。

浅井も驚いて振り向いた。

「国道で轢かれてぐちゃぐちゃになったやつ」

えっ・・・と栗尾もひきつった顔で呟いた。

バーテンは無表情に大沢を見下ろし、いえ、と答えた。

「あんただよ。外に止まってるバイク、あれだったよ」

「違います」

やはり無表情にバーテンが首を振った。

店内の全員が注目している。

天井のスピーカーからピアノ曲が流れていた。

浅井は全身が熱いような冷たいようないたたまれない気持ちになり、慌てて大沢の腕を引いた。

大沢はそれを振りきり、大きな声を出した。

「その手で、ネコ始末したんだろ？」

浅井がまた大沢の腕を掴んだ。

「その手で平気で食いもん作ってたんだ？」

大沢はもう浅井の手を振り払わなかった。

それでも浅井は両手で強く掴んで、店の外に引っ張っていった。

「なんてこと言うの！ここ飲食店なのよ？営業妨害って言われてもおかしくないわ！」

店の入り口からも遠く離れた駐車場の角で浅井が大沢を叱り付けた。

「信じられない！ここだってきつとうちの顧客なのよ？」

浅井の会社の業務内容は業務用厨房機器のリース、販売、修理、メンテナンス。

主に代理店を通して一般飲食店に設置されている。

大沢の仕事は修理メンテナンス。この店に来る可能性だってある。「いくら酔ってたってそのくらいの自覚もないなんて、」

大沢は無表情で聞き流している。

そんなに酔ってはいない。ただ、いらついでるだけ。

その衝動の延長で、目の前で真っ直ぐ大沢を見上げて怒っている浅井の両肩を掴んだ。

浅井が息を飲むと同時に、大沢がその腕を引き寄せて顔を近づけた。

浅井が顔を伏せて腕から逃れようとすると、大沢が更に強く肩を掴みなおす。

「浅井さん」

大沢が名前を呼んだが、浅井は尚一層抵抗した。

何これ？

何？大沢君ってこんなことする人？

どういうこと？これ、どういう意味？

とまどいながらも、浅井はわずかに屈辱を感じていた。

たった一回一緒に街を歩いただけで、どうしてこんな扱い？
なんでこんなに強く掴まれなきゃならない？

さっきバーテンを罵ったことよりも、浅井は今掴まれている肩の
痛みで大沢を見損なっていた。

これだって暴力の一種だ。

唇を噛んで、力を入れてその両手を振り払った。

完全に拒絶されて、大沢が何かを言おうと息を吸った。

その時力ちつと勝手口が開く音が聞こえ、誰かが出てくる気配が
したので、大沢は手を下ろして吸った息を吐いた。

そして、出てきたのはヘルメットを下げた、あのバーテン。

二人の姿は目に入っただろうに、バーテンは顔も向けずに真っ直
ぐ駐輪所に向かった。

とっさに浅井も大沢に目もくれずに、バーテン目指して走り出し
た。

迫ってくる浅井の足音に気付いているだろうに、バーテンは振り
向きもしない。

その浅井の後姿を大沢はしばらく眺めていた。

そしてとうとうバーテンが浅井を振り向いたところで、踵を返し
た。

「お連れの人、店に戻りましたよ」

バーテンが走ってくる浅井を振り向いて、一度目を動かしてから言った。

「うん？いいの。二人で、来たんでもないし」

ちよつと走っただけで息が切れた。しかしまず謝らないと。

「さつきは、ごめんなさい。もしかして、叱られて、帰るところ？」

「いえ。元々この時間までです」

バーテンがあっさり即答する。

「そう。それでも、あんなこと、ごめんなさい」

「いえ」

バーテンは、会釈をして立ち去ろうとした。

「あの」

浅井が呼び止めた。バーテンが顔だけ向けた。

「猫のこと、訊いていい？」

バーテンは、首を傾げてからまた歩き出した。だから浅井もその後について歩いた。

浅井はバーテンのあの行動にずいぶん感動したのだ。

きつと動物好きの優しいお兄さんなんだろうと想像していたのに、どうも様子が違う。

だからこそなおさら興味がわいた。

母校の後輩だということも、痛みと共に強く印象付けられた。

この無愛想な理系のバーテンが、誰もが目を逸らした猫の最期を引き受けたのはなぜなんだろう。

まだ少し荒い息を整えながら、訊いた。

「どうしてあそこで、わざわざあんなことできたの？」

バーテンは振り向かない。

「だってもう、生きてなかったし、誰も助けられなかったし、あんなことしても、」

そして到着した駐輪所でバーテンがヘルメットを置いたバイクは、ライムグリーンだった。

「通り過ぎたつてしょうがないし、みんな嫌だなんて思いながら通り過ぎたと思うのに、」

バーテンがキーを回してセルを押した。

そして始動したエンジンを二三度吹かした。

安定したはずのエンジンがなんとも不規則な爆発音を繰り返す。

バイクってこんなものなの？と気を取られていると、バーテンが口を開いた。

「あそこ、よく通るんです」

バーテンがメガネを外した。

「気付かなかつたら通り過ぎたけど」

そう言った後でヘルメットを被り

「気付いたのでああするしかなかった」

シールドを開けてメガネをかけ、

「ああしなかつたらこの先あそこを通る度に後悔する」

グローブを嵌めてスタンドを蹴り上げ

「別に猫のためじゃないです」

バイクをバックさせて駐輪所から出し、シートに跨った。

「俺が不愉快だった。それだけです」

それからヘルメットのシールドを下げて左足でシフトを落とし、浅井に会釈して走り去った。

浅井はその姿をしばらく見送っていた。
バイクが交差点を右折して見えなくなっても、まだ立ち尽くしていた。

バーテンの答えは、期待以上だった。

俺が不愉快。なんてシンプルな。

何の装飾も言い訳もない。だから、強い。

シンプルで単純なものが一番強い。どんな場合でも。

そんなことを改めて教わった。

そうだ。私もシンプルに強くなろう。

浅井はなんとなくそう思いついて、笑った。

その浅井を、店から出てきた大沢と、それについてきた栗尾が見ていた。

そして浅井が振り返って店に戻る前に立ち去った。

「浅井さんって、年下が好みなのね。大沢君も気をつけなきゃ！」
二人のことを知っていて、栗尾が警告する。

「でも若いっただけで好みに全然共通点がないのよね。大沢君だって若いんだから毒牙にやられちゃうわよ！」

鬱陶しいな、と大沢が言いかけた時に、栗尾が声を潜めて続けた。

「でも、気持ちはわかるわよ。だって最初の彼と不幸な別れ方したじゃない？もう年上が怖いって思ってもしょうがないのよね」

探偵に頼んでいた浅井の調査がこんなに早く届いたのは、新聞に名前が載っていたからだ。

生まれ故郷での詳細な調査はまた後になるが、今回の報告だけでも浅井の衝撃的な過去が明らかに、栗尾は満足していた。

ただ少しの嫉妬は感じていた。

悲劇のヒロインのような物語に。

「情熱的だったのよね。浅井さん、若い頃は」

大沢は驚いていた。

自分には内緒と言って隠した過去を、栗尾には伝えている？

「浅井さん、今でも好きなんだと思うわ。だって今でもその時の彼の話、よくするもの」

もちろん嘘だ。浅井は過去の話一度もしたことがない。

こんなに激しく美しい過去を持ちながら、一人で秘めている。そのことすら美しい。

そして栗尾にはそれが許せない。

その自己陶醉をぐちゃぐちゃに踏み潰してやる。

大沢を別の店に誘い、栗尾は滔々と浅井の過去を物語った。それを拒む勇気は、大沢にはなかった。

週末だと言うのに大沢からの連絡がない。

クリスマスまであと10日。

浅井はコタツに入って赤いマフラーを編んでいる。

昨夜は大沢と栗尾が先に店から消えた。

同行した全員が実は大沢と浅井のことを知っていて、それを知らない素振りをしていて、しかも栗尾の大沢に対するアプローチも周知の事実で、その二人が早々に消えたということをサカナにこの後も飲みたいのに、浅井の前で口にできる話題ではない。

他に話題がないだけでなく非常に会話もぎこちなくなり、そのまま盛り下がって忘年会はお開きとなった。

浅井はその後何度も大沢の携帯に連絡したが、電源が入っていないと返されるだけだった。

いらいらしながら編み目を増やしている。

考えたくないと思いながらも他に思いつくこともない。

栗尾さんと二人で消える？

大沢君、否定してたわよね？

そうじゃないのなら最初から言えばいいだけのことじゃないの。

胸の中でブツブツと文句を言いながら編み目を増やしている。

それよりも栗尾が浅井の隠している過去を知っていることが不気味だった。

なぜ知っているのか、何をどこまで知っているのか、何が目的なのか。

わかるはずもなくブツブツと悩みながら編み目を増やしている。

だけど、何を言われても無視しよう。

どんなふう引掛られても、先輩のことは口にしない。

あんなふうに、酔ったはずみで話題にするような、

先輩はそんな人じゃない。

悔しくてたまらない気持ちをごまかすために、浅井は編み目を増やしている。

ブツブツとマフラーを伸ばしていると、コタツの上に乗せた携帯が鳴った。

すぐに取り耳に当てると、

「ごめん。君島です。今いい？」

と高い声が聞こえた。

浅井は思わず笑って、ベッドに背中をもたれて答えた。

「うん。いいよ。今一人だし」

「え？一人？なんで？土曜日なの？」

声を上げて笑ってしまった。

「あなただって土曜日にどうしたのよ？たくさんいる彼女は？」

納得はしていないものの、事実なので君島に突きつけると

「だからさ。彼女たちには亭主とか彼氏とかがいるんだよ。基本的

に僕は土日フリーなの」

呆れて天井を見上げた。

「あれ？もしもし！」

言葉がないよ、君島君。と、また浅井は笑った。

「あはは。言葉がない？」

君島君と付き合う女たちは、寂しいのかも知れない。

笑いながら浅井は思った。

見捨てられた自分をごまかしたくて、君島君を利用しているんじゃないだろうか。

そういう気持ちは、あるのではないか。

「浅井さん、ヒマなら出てこない？」

私が今君島君に会いたい気持ちと、何が違う？だとしたら、会えない。

「この前借りた本、面白いね」

会う理由がない。

「続きを読みたいんだけどさ、自分で買う気にはならないんだよね」
だって私たちは、

「浅井さん、買うでしょ？今日買って先に僕に貸して」

・・・・・・は？

「じゃないと借りた本返さないよ」

うつかり爆笑した。

完璧な理由を作られてしまった。

これじゃしょうがなく会いに行くしかないじゃない。
なんて上手なんだろう。

もしかしたら君島君の彼女たちも、こうやって引きずられたんじゃないだろうか？

君島君は、お互いに利用しているのだと言った。

私もその一人になるのだろうか？

それは、悪いことだろうか？

大沢が昨夜戻ってきたのは遅かった。朝方と言ってもいい。

栗尾に聞いた浅井の話のせいでその後全く酔えなくなり、何をどれだけ飲んだかも覚えていないほど飲んだ。

栗尾は話し終わってすぐに酔い潰れ、またタクシーで自宅まで送り届け、大沢はその後店を変えて一人で飲み続けたが、まるで酔えなかった。

その事故は覚えていた。

当時かなり話題になった有名な事故だ。

大沢は中学生だった。

峠道のガードレールを突き破り、10mの崖下に転げ落ちた車両が発見された。

悲惨な車体の潰れ様に、生存者はいないだろうと警察も救急隊員も一目で思った。

もし命があっても相当な重体に達しない。

まず確認に降りた警官が発見したのは、運転席の大柄な男性の遺体。

ただ横転して転げ落ちているためか、まるで運転席から立ち上がったようにその位置が動いている。

あるいはシートベルトが機能しなかったのか、助手席に覆い被さるように体を伸ばしている。

そして車体はそのまま潰れているのだ。遺体も潰れている。助手席に逃げようとしたのだろうか。

体力的時間的にこれだけ余裕があつたのなら、
むしろ体勢を低くしてシートの下に潜るなどで衝撃に備えていた
らあるいは、

そんな不可解とも言えない程度の男性の遺体状況の理由を、反対
側に回った警官が叫んだ。

「助手席に！もう一人います！シートベルトが伸びてる！」

慌てて集まり、手持ちの道具でドアを開け、潰れた男性の下から
なんとか引っぱり出したのは
髪の長い若い女性だった。

意識はないが呼吸がある。奇跡だ。

救急隊員も降りてきて、女性をタンカに乗せて吊り上げた。
男性の遺体は完全に挟まり潰れていて、車体を切断しなければ出
せない。

「こんなになつても」

救急隊員がそこで言葉を詰まらせた。

誰もが唇を噛み締めた。

両腕で彼女の両肩を押したまま、彼は息絶えていたのだ。

その、助けられた若い女性が、浅井。

「まだ18・9でそんなことになったのよね。忘れられないと思う
わ」

世間の涙と感動を呼んだ事故だった。

「意識が戻った時には彼のお葬式、終わってたんですって。可哀想
ね」

誰もが自分を犠牲にした男を称え、悲しんだ。

「だから浅井さん、学校やめて会社に入って、実家に戻らずにここ

に残ったのね」

俺に内緒にしてたのは、そんな男のことだった。
大沢は打ちのめされていた。

「でもそんなこと、言わなくてもわかつちやうことじゃない。
そうよ。そういえばおじさん、ずいぶん同情してたもの。可哀想
な事故だって」

今の大沢にはどうでもいい言葉だが、唐突なので引かなかった。

「そうか。きつと可哀想だから採用したんだわ」
大沢の視線に気付いて、栗尾が微笑んだ。

「そう！うちの会社の社長ってね、私の伯父さんなの！」

昼過ぎに、先日会社帰りに一緒に寄った喫茶店で君島と待ち合わせすることにした。

メガネをやめてコンタクトにしたのだが、大沢に悪い気がしたのでスカートはやめた。

それでも君島に会うのが後ろめたい気がする。

連絡してこない大沢君が悪い。

昨日だってあんなふうに、栗尾さんと帰ったんだし、私が今日誰と何をしようと、

と思いつつも、やはりすつきりはしない。

なんなんだろう、一体。

もしかしたら大沢君って、ずいぶんイメージと違う人なのかも知れない。

そんなことを考えててもしょうがない、と浅井は首を振った。

定期で地下鉄に乗り、駅で降りて徒歩5分。

大きな窓の開放的な喫茶店で、君島はもう窓際の席に座っていた。外から見ても目立つ華やかさ。花をあしらうよりも窓が豪華に見える。

きっとその効果を狙ってお店の人がそこに案内したに違いない。

そんなことを考えて、浅井は笑った。

その視線に気付いたのかどうか、君島が顔を上げた。

そして微笑む浅井を見て、一瞬冷えた笑みを見せた。

見間違いかと思えるほどの短い瞬間。

すぐにいつもの華やかな笑みに変わったので、浅井も微笑んだまま喫茶店の入り口に向かった。

しかし、さっきの君島の笑みが頭から消えない。

あの凍った瞳。

君島の冷たい視線に射られたせいで、浅井の頭もすっかり冷えた。一步一步歩きながら、頭の中に貼りついたさっきの笑みを凝視して、一つ一つその意味を剥ぎ取る。

美しい笑顔だった。

初めて見たなら。

しかしあんな冷たい視線を、浅井は一度も向けられたことがない。

誰に向ける目か？

誰に向ける目を、私に向けたのか？

浅井は推論を一つ、導いた。

それが解かを知る問いも、思いついた。

喫茶店のドアを開け、近寄ってきたウェイトレスに、

「待ち合わせ。お水もいらさないわ」

と断り、大股で君島の座る窓側の席まで進んだ。

様子の変わった浅井に驚き、君島が立ち上がって

「どうしたの？」

と訊いた。

そして浅井も訊いた。

「私を、試した？」

一瞬で君島の頬が紅潮した。
それが解だった。

浅井は微笑んだ。

「帰るわ。またね」

そう言っただけを返した。

え！待って！と後ろから君島の声が聞こえていたが、かまわずドアを開けて店を出た。

走り去るつもりはなかった。

追いかけてこなければそれでもいいと思っていた。

「浅井さん！」

君島の高い声が聞こえた。

振り返ると、目を大きく開いた天使のような少年が、自分に向かって駆けてくる。

その表情は知ってる、と浅井は思った。

初めてコンタクトショップの鏡越しに見た顔と同じ。

女の子だと思った。可愛い女の子の困った顔。

ごめんなさいって謝ってくれたわね。

浅井は微笑んで、走ってくる君島を待った。

もうこれで最後だと思ったから。

「さっきの、どういうこと」

君島が浅井の目の前で止まり、訊いた。

私に言わせるの？赤くなっただけに。

そう思って笑った。

笑っていないと、涙が落ちそうだった。

「私を彼女たちと比べたんでしょ？」

あの冷えた瞳は、君島の彼女たちに向けられるものだ。

「私も彼女たちの一員になれるかどうかの試験だった？」

浅井も大沢という相手を得て、その資格は充分だったのだ。

「ならないからね。私、そんなに君島君好きじゃないよ」

もしあの冷えた瞳を見てなければ、今頃どうなっていた？

「友達にしかないから」

どうにもなっていない。私はこの子を利用したりしない。

「それがだめなら、ここでお別れ」

この子とそんな付き合いは、したくない。

「そういうことなの」

この子にそんなふうに利用されたくない。

悪いことだろうか、と来る前には思っていた。

「冗談じゃない。」

この子をそんなふうに利用したくない。

君島は目を丸くしたまま、口を結んだまま、浅井を凝視していた。君島が浅井を試したように、今は浅井が君島を試している。

仕返しという訳ではない。

これは駆け引き。

そこまでわかっていたのに、どうしても耐え切れず、君島は吹き出した。

「ごめん！あの、」

笑いながら言い訳した。

「そんなつもり、なかったんだ、本当に、」

笑いすぎて涙が出た。

「こんなに、見事に振られるなんて、」

その涙が呼び水になった。

君島がしゃべれなくなった。

片手で顔を覆い、俯いて動かなくなった君島に驚いて、浅井は慌ててその手を引き、人の少ない路地を駆け抜け抜け小さな公園まで走った。

自動販売機で熱いお茶を二本買って、ベンチに座る君島に一本渡す。

浅井はベンチの横の枯葉がわずかに残る立ち木にもたれてペットボトルの蓋を開けた。

しばらくして君島が大きいため息をついて、空を見上げた。

泣き腫らして目も鼻も赤い。その顔も可愛いわ。

浅井はそう思い、笑った。

その浅井の笑顔を見て、君島が言った。

「女の子みたいに可愛いと思った？」

浅井は答えず、微笑んだまま君島を見下ろした。

君島も微笑んで俯き、語りだした。

「今日、約束があつたんだよ。人妻と。でも今朝になって亭主の外出の予定がキャンセルになったからって電話が来てね。

僕の約束もキャンセルって思うでしょ？」

浅井が頷く。

「そうじゃないんだって。僕には会いたいんだって。それでね」

君島が浅井を見上げた。

「僕に迎えにこいって。亭主に紹介するって」

え？と浅井が驚いた。

「だから、女装してこいって」

君島は微笑んでいた。

その笑顔に、浅井は胸が潰れるような気がした。

「別に、こんなこと初めてじゃないんだ」

君島は再び顔を伏せた。

「僕はそういう意味でも便利だから」

浅井が立ち木から離れ、君島の横にしゃがんだ。

「僕だつて彼女を利用してるしね」

君島は浅井を見ずに続けている。

「だから僕は、」

浅井が被せるように言葉を続けた。

「だから彼女たちが嫌いなんでしょ？」

言葉を奪われた君島が、浅井を見下ろした。

やっと目があった君島に、浅井が微笑んで言った。

「だから嫌よ。彼女たちの一員になるのは」

君島が一瞬目を丸くして、その目をぐるりとまわしてから、あ、と息を吐き出した。

そして髪をかきあげて空を仰いであら浅井を向き直って言った。

「だから、真ん中省略しないでよ！」

君島は、赤い目のまま笑っていた。

今は省略してなかったでしょ？と浅井が言つとさらに笑った。

ざっくりカットしてるよ。まったくもう。

笑いながら君島もペットボトルを開けた。

その笑顔にほっとして、浅井が立ち上がったのだが、足首がバキッと鳴った。

君島がまた吹きだして、運動不足だよ！とさらに笑った。

そのあとしばらく笑い続けた。

笑いすぎよ、と浅井が抗議しても君島は笑っていた。

君島君を見て微笑んだ私の表情が、彼女たちに似ていたのかも知れない。

反射的に君島の笑顔が凍ったのかも知れない。
そう思いながら、浅井は暖かいお茶を両手で握った。

この子は笑っている方がいい。

こんなふうにキラキラ光る笑顔が一番いい。

そしてしばらくして、君島が浅井を見上げた。

「浅井さんは、変な人だね」

失礼ね、と笑顔で睨む。君島が笑ったまま続けた。

「こんな話聞かされても、引きもしなきゃ同情もしないんだ」

浅井は笑顔を引っ込めなかった。

君島も笑顔でそれを覗き込んだ。

「僕の、友達にはなってくれるんだよね」

浅井が頷いた。

「僕ね、友達少ないんだ」

そんなネガティブなことを言いながらも、君島はやはり晴れやかな笑顔を見せる。

「しかもね、僕の友達ってのは、みんな友達が少ないやつらなんだ」

「そう。じゃあ資格充分だわ、私」

苦笑してまたペットボトルに口をつけた。

「それにね」

君島が、嬉しそうな顔で続けた。

「僕を好きじゃないって言ったしね。それで充分」

「僕を好きって言う人は、たいてい僕の顔が好きなんだ。
違っつて反論されてもだめなんだよ。僕がそう思いこんでるから
ね」

あら。私も好きよ。

「だから、好きって言われるだけでもう信用できない。
僕の中味が好きだって言われても信用しない」

あなたの中味も好きよ。

「相手に悪いとも思わないしね。
僕を好きだっていう相手は信用しない。
僕がそう決めた」

あら。

浅井は心の言葉を全部飲み込んだ。

「だって、僕は自分の顔が嫌いなんだ。
その嫌いなものを好きだって言う人と、気が合はずないよね」
あ。なるほど。

「僕がそう決めた」

笑う君島を見て浅井はまた苦笑した。

それならどうして、信用しない相手と付き合ったりするの。
その質問も飲み込んだ。

君島君には笑っていて欲しい。
特に今は。

思った以上に複雑な男の子。
同情なんかしないけど、余計なことで傷付いて欲しくはない。
こんなにも綺麗な笑顔を持っているんだから。

……って言うと、嫌われるのね。
気をつけよう。

「もうすっかり寒いね。枯葉も落ちちゃってるね。
ね、ちよつと早いけどご飯食べに行かない？鍋」

君島がベンチを立ち上がって言った。

「鍋？」

「寒いから」

「鍋ねえ。そういえば会社の近くに美味しいところがあるわ」

「そこ行く。決まり。って、浅井さんってどんな会社に勤めてるの？」

「え？あれ？言ってなかった？って、そういえば君島君だってどこ
の大学？」

「あれ？言わなかった？大学じゃないよ。看護学校」

「あら！看護師さん？」

「の卵」

「えー！初めて聞いた！」

「浅井さんは？」

二人で歩きながら、あそこのコンビニの向かいのビル5階にある
オフィス、と指差す。

そのコンビニで右に曲がって5分歩くと、美味しい鍋屋さん。

「こっちの方は来たことないよ。穴場だね！」

「オフィス街だもんね。あんまり知られてないかもね」

そうかあゝ！じゃあ今度友達に教えよう！

ん？数少ない友達に？

そうそう。

二人で笑いながら引き戸を開けて、元気な声に迎えられた。

夕方近くは大沢はチャイムで起こされた。

二日酔いの最悪の気分であらう頭を右手で押さえながら玄関まで出ると同僚の田村だった。

「お。悪い。電話しても出ないから直接来た。仕事手伝ってくればか言うな。見てわかるだろうが。仕事どころかまともに歩けないんだぞ、と口に出すことすらできないのに、田村は勝手に部屋に上がりこみ、大沢の仕事着一式と道具、作業靴まで取り揃えて、大沢を拉致した。

現場までのトラックで作業工程を聞かされたがまったく頭に入らない。

現場では体が覚えている作業を体が勝手にこなしていた。大沢はただただ倒れなければそれでいいと、それだけを考えていた。

無事作業が終了して、お疲れさ〜ん、と田村に背中を叩かれて、戻しそうになり堪えた。

「晩飯おごるわ。迎え酒もアリだぞ！」
聞きたくない。

「つうか昨日、どんだけ飲んだの？」

トラックに戻り、田村が訊いた。大沢は返事もできない。

「つうかお前さ、本社の浅井さんと付き合ってたろ？それをさ、浅井さんも来てる二次会で栗尾お持ち帰りってどうよ？」

「うっ、なんでお前が俺と浅井さんのこと知ってるの？と、気持ち悪さに耐えながらも疑問には思った。

浅井もちろん誰にも発表してないが、大沢もまだ誰にも言っていないかった。

なにしろ先週一度デートしただけの間柄で、クリスマスの約束をとりつけただけの間柄で、しかも今のこの状況を思えば先に続けられる自信もない。

だから大沢は返事をしなかった。

トラックを本社の駐車場に停め、歩きながら田村が続けた。

「だいたいあのおばちゃん、若いのが好きなんだって？」

何でお前がそれに引っかけたってんのか不思議だけだよ」

あ？・・・なんだそれ？

「てかお前だって若いってだけでおばちゃんに目つけられたんだろ？」

・・・それ、誰に聞いたんだ？

痛みは引いたがぼんやりする頭を支えて、大沢はむかっている胃がさらにむかついてくる気がした。

「お前ってそんな趣味だったっけ？意外だよな。面食いのくせにさ」
笑いながら田村が店の引き戸を勢いよく開いた。

ほぼ同時に、あつ！と甲高い声が聞こえた。

「あつ！すいません、」

ちようど中から客が出てくるところで、田村がぶつかりそうになったのを謝った。

「いえ、大丈夫です」

その声にも聞き覚えがあった。

しかし大沢はそれよりも、その後ろに立つ女性の姿に息を飲んだ。

浅井さん。

支払いをどっちが持つかでちよつともめて、結局折半に決まり、浅井がカードで決済するので君島が自分の支払い分を浅井に渡した。だから君島が先に出口にむかい、浅井はカードや財布をバッグにしまったりしていて、君島が声を上げた時にちらりと状況を確認してまた目をバッグに戻した。

「こんばんわ」

君島の挨拶が聞こえた。

おや。知り合いだったのね。とまだ浅井は気付かなかった。それから顔を上げ、正面に立つ男性が、業社の社員の田村だと気付いた。

そして君島が挨拶をしたのはその後ろに向かってだったとやっと気付いた。

「浅井さん」

その大沢が、名前を呼んだ。

「え?!」

田村が驚いて大沢を振り向いて、そして浅井をまた見て、また大沢を振り向いた。

田村が、メガネを外して髪をほどいて私服を着ている浅井を見るのは初めてだった。

「え!浅井さん・・・?!」

名前を呼んだものの、大沢はその後を続けることができない。昨日知った様々なことを整理できずに、体調極悪の中仕事をしてきたのに、昨日はバーテンを追いかけて、今日は小僧か?

どうして休日に、小僧に会ってるんだ？

会うなら俺だろ？

そして俺ですら、不足のはずだろ？

あんな強烈な過去を持つていて、今あなたがしていることは何だ？
命懸けで彼に守られて、今あなたがしていることは何だ？

思考がめちやくちな方向に飛びまくりまとまらず、大沢は言葉を
探せない。

その間、田村一人が声をひっくりかえして驚いていた。

うわ！浅井さんっすか？本当に？

いやゝ、びっくりしました！全然変わるもんっすねゝ！

てか、会社もこれで来てくださいよ！だとなあ！俺たちもなあ！
って、違うか。大沢はあれだもんな。

てかお前、本気だったんだな。

焦っているのか興奮しているのかわからない田村のおかしな日本
語の、最後だけ大沢は汲み取った。

本気だった。

そう、俺、本気だった。

あなたにもそう言った。

あなたもそれを受けたはずだ。

過去なんか知らない。

それで、

これは誰だよ？

大沢がいきなり君島に掴みかかった。

「大沢君！」

「大沢！」

浅井と田村の二人が同時に叫んだ。

胸倉を掴まれた君島が店外へと引きずり出される。

「その顔で」

大沢を見上げる君島の顔が、少女のように可愛い。

今の大沢にはそれすら憎い。

「その女みたいな顔で、油断させるのが手か？」

まだ二日酔いからはつきりと覚めない大沢は、この状況にも冷静な視線で見上げる君島を疑問には思わなかった。

そしてたった今大沢が口にした言葉は、君島への最大の侮辱だった。

二人の体格差を考えれば、これはただの卑怯なリンチだと、浅井と田村は慌てて止めようとした。

大沢が右肘を後ろに引いて、拳を君島の顔目掛けて突き出した。

君島はわずかに首を傾げてそれを避け、そして空振りしたその右腕を掴んで上に持ち上げ、大沢の胸を伸ばしてから、軽くステップを踏むように足を合わせ、右ひざを大沢の腹にぶちこんだ。

大沢が、うぐ、と唸った。

君島は、掴んでいた大沢の右腕を自分の後ろに引いて、大沢を道路にどさりと倒した。

わずかの間の出来事で、浅井も田村も呼吸を止めていた。

ほんの瞬間だった。

一切無駄のないなめらかな一連の動きに、まるで大沢は練習相手かのように、まるで決まった手順を踏んでいるだけののように、正確に捉えられた。

ふわりと膨らんだキャメルのコート。

素直なシヨートヘアを揺らして、君島が肩越しに浅井を振り向き、微笑んで挨拶をした。

「ごめんね、浅井さん。これで最後にしよう。」

本はね、月曜日にそのコンビニに持ってくるよ。お昼ならいいよね？」

キャメルのコートを翻して君島が走り去った。

「君島君！」

呼んでも振り向かない。

追いかけてようとした。

しかし、と大沢を振り向く。

大沢は道路に座り込んでいて、田村に背中をさすられている。田村が言った。

「今こいつ、かっこわるいんで見ないでやってもらえますか」

でも、と浅井が言っと、田村が首を振って続けた。

「俺が送って行くんで、大丈夫です」

「じゃあ、お願いします」

そう言つて、浅井も歩き出した。
そして走り出した。

君島に追いつけるんじゃないかと駅まで走つた。

寒い冬の夜なのに、全力疾走したせいで汗が落ちる。

息を弾ませてホームを全部回つた。

どこにもいなかった。

大丈夫。

大丈夫。

月曜日に会いに来るつて言つてた。

その時にまたきちんと話せばいい。きつとわかつてもらえる。

だつて私は、

大沢君を許せない気がする。

浅井は荒い息が治まるまで、駅のホームで仁王立ちしていた。

翌日浅井は一日中家にいた。

誰にも電話をしなかった。誰からも電話は来なかった。

大沢からも君島からも、連絡はなかった。

一晩寝て起きて考えても、大沢が悪いとは思えない。

そして君島を傷つけた罪悪感が募る。

自分と大沢で君島を傷つけた。

君島は昨日、それでなくても充分傷付いていたというのに。

明日は謝ろう。

精一杯謝ろう。

許してもらえるまで謝ろう。

大沢も一日中家にいた。

飲まず食わずで。

ベッドの上で呻きながら、丸一日後悔していた。

何もかも後悔していた。

どこから後悔していいのかわからないぐらい後悔していた。

あんな醜態を晒したことも初めてだった。

肉体労働をしていることもあり、自分の体力には自信があった。

体も大きい方だ。

けんかで負けたこともないし、そうけんかを仕掛けられることもなかった。

それをあんな、女みたいに小さいやつにあっさり。
浅井の前で。田村の前で。

ここに来るまでの車中で田村は無言だった。
別れの挨拶も一言だった。
つまり

月曜日には知られ渡っているだろう。
浅井と大沢のことを知る者全てに。
分つてはいたが、口止めはしなかった。
しても無駄だからだ。
口止めた、ということも知られ渡るのがオチだ。

どこから後悔するって、
あの日チビにナンパされた浅井さんに会ったところからだ。
キューピッドなんてとんでもない。
あいつが疫病神だったんだ。

キャメルのコートを着た、悪魔だ。

大沢の予想通り、土曜日の一件は週始めの事務所の一大ニュースになった。

上司も含めた浅井以外の全員が小声で噂している。
なにしろホットな話題であり、数時間後に間違いなく展開するのだ。

浅井以外全員そわそわしている。
そしてそれに気付かないのも、浅井一人だった。

周囲に目を配る余裕がない。仕事も手につかない。
君島君を、どう引きとめよう。何を言おう。

キーボードに両手を置いて、その間を凝視して、仕事をしている
振りをして固まっている。

まず謝らなきゃ。

浅井はずっとそればかり考えている。

昼近くに、田村が来た。大沢はいない。

浅井が気付いて会釈をすると、田村が意味ありげな笑みを浮かべた。

浅井はそれを無視した。

嫌な気持ちにした。

まるで秘密を共有しているかのような。

もっと言えば、共犯意識を強制されているような。

笑えるわけがない。

あんなふうに君島君を傷つけておいて。

私は大沢君も許してないのよ。
自分も許せない。

やはり浅井は、自分の両手の間を凝視していた。

そして正午になり、浅井が席を立ってエレベーターに向かった。
普段なら向かいのコンビニに行く社員が必ず数名いるのだが、今日は誰も動かない。

全員窓からそのコンビニを見下ろすつもりだからだ。
浅井は一人でエレベーターの扉を閉めた。
その不自然さにも浅井は気付かなかった。

横断歩道を渡りコンビニの前で立ち止まる浅井を、会社のビル横から大沢が見ていた。

車で到着したばかりだが、田村の車があるのをみて事務所に上がるのを止めた。

田村の車がなくても上がるつもりはなかった。どうせ噂は広まっているだろうから。

しかしここで男を待つ浅井の姿を見るのも辛い。
それでも来ずにはいられなかった。

「いや、俺、あんなにきれいな人だったとは気付かなかったよ！」
浅井がいなくなり、田村が大声で得意気に話し始めた。

「でもキレイって言ってもなんていうか、やつぱりねえ？」

反論にならない反論で栗尾が話題を遮る。

「だったら普段からちゃんとしろっていうのよね！」

しかしそれを無視してさらに話題が沸騰する。

「そうよね！私も驚いたもの！大沢君がアサイサンって呼ばなきゃ
気付かなかったわ！」

大沢と浅井のデートを目撃した事務員。

「そうそうそれと！あの女の子みたいな男の子！びっくりするぐらい
可愛いのに！」

浅井が会社帰りに君島と喫茶店に行った後をつけた事務員。

「それ。その超可愛い男に、大沢は無様に投げられたってわけさ」

「信じられな～い！ていうか意味わかんない！」

「俺もさ、超可愛いから男だって気付かなくて、それなのに大沢が
胸倉掴むからさ、必死で止めようとしたわけよ！」

微妙に田村の演出が加わる。

「それがさ、確か、女みたいな顔して、って大沢が言ったんだよ。

それで俺びっくりして、だって女だとはっきり思ってたからさ、そ
れでびっくりしてるスキに、大沢があっさり投げられてたんだよな」

「あら・・・。すごく可愛いわ」

「ね。あんな可愛い顔して、あんなに大きい大沢くんを投げるほ
ど強いからね」

「紹介して欲しいわ」

「何言ってるの？あんなたち。だいたいどういう付き合いかわかん

ないじゃない？」

栗尾が何が何でも話題を切り裂こうとする。

「まあ、その女みたいな男がこれから来るんだからさ。どういつ付き合いかわるんじゃないの？」

田村が窓を指差した。

「つゝか、男だっただけで問題だけどな」

昼休みは0時から1時まで。

この時間内に君島君を説得できるだろうか。

浅井はタバコの自販機の横で俯いて考えていた。

前の大通りの往来で、太い排気音に気付いた。

その音を覚えていたわけではないのだが、なんとなく目を上げた。

そして目に入ったのは、ライムグリーンの大型バイク。

あのヘルメット、あのブルゾン。

バーテンだ。

バーテンがバイクで通り過ぎていく。

その偉そうで自由そうな姿を見て、凝り固まっていた悩みが溶けた気がした。

『俺が不愉快だったから』

ネコのことをバーテンはそう言った。

そして私もシンプルに強くなろうと思ったはずだ。そうだ。

私は君島君のともだちになると言った。

彼女たちの一員じゃなく、ともだちになると言った。

彼女たちの一員だったら別れることもあるだろうけど、私はともだちなよ。

あなたのともだちになる資格だって充分だったじゃない。

うん。また、絶対会う。

絶対ともだちはやめないわ。

浅井は何度も頷いた。

その姿に励まされながら見つめていると、バイクが交差点の右折レーンで止まった。

おや？この前は直進したと思ったけど？

といぶかしんでいるうちに、バイクはウィンカーの方向に曲がった。

そして右折するのかと思いきや、Uターンしてガードレールの切れ目からコンビニの駐車場に入ってきた。

あら？ここに用事？

あら。なんて偶然。

そして、はつと息を飲んだ。

バーテンのあのシンプルで強い論理で君島君を説得してもらえないだろうか。

いや、無理だよな。

と一瞬で却下した。

だいたいどうやって君島君に、私のことを覚えていないかもしれないバーテンを紹介するのだ。

バカだなあ私。

いいんだ。大丈夫だ。ともだちなんだから。

と繰り返し考えて浅井は自分に暗示を掛ける。

それにしても遅い。休み時間がなくなってしまう。

説得する時間がどんどん短くなる。

そしてふと気付いた。

もしかしてそれを狙ってたりして。
ぎりぎりに来て、じゃあねって。

そしてそれつきり。

そんな……。どうしよう。

どうする？バーテン君ならどうしますか？

浅井はバイクを見ながらずっと悩んだ。

「え？ちよつと、あれ、ジガーレイのバーテン？」

「ええええ！！！！なんで？え？」

「浅井さん、すごくない？！」

「バカじゃないの！ここ通学路でしょ！この前だってこの時間通ったじゃないの！」

栗尾が水を差し続けているが、一向に熱は冷めない。

「だって二次会の時、浅井さん外でしゃべってたよね？」

「ねー！！！！見た見たー！！！！バイクのところだねー！」

「それで大沢君が……」

その後は栗尾に遠慮して続けない。

最後は田村。

「大沢いなくてよかったよ。あいつこんなの見たら……」

その大沢は、道を挟んだ真向かいで見ている。

駐車場の車の枠内にバイクを止め、エンジンを切ってサイドスタンドを出した。

明るい日中に間近で見ると、巨大なバイクだ。

乗っているバーテンも巨大だ。

ヘルメットを脱いでグローブも脱いだ後に、浅井と目が合った。

バーテンも先週末の客を覚えていたようで、軽く会釈をした。

あら。覚えててくれたんだ。じゃ、もしかしたら今君島君が来たら案内助け舟を出してくれたり？

……しないよねえ。

と、浅井も軽く会釈を返した。

それにしても遅い。

と浅井がきよろきよろと視線を動かした。

来るんだろうか。来るよね。

君島君が、来るって言っただから。

来るよね、君島君。

浅井はじりじりと待っている。

バーテンもぐるりと駐車場を見回した。

二周見回してから、もう一度浅井を向いた。

じりじりしながらも、視線に気付いて浅井もバーテンを見上げた。

それから、バーテンが浅井に訊いた。

「浅井さんという方、ご存知ないですか？」

浅井は少し口を開けて、硬直した。

返事がないのでバーテンが首を傾げて

「すいません。俺も顔知らないのです・・・」

と、首の後ろを掻いた。

あ、もしかしたらバーに何か忘れ物でもした？私の名前入りのものを？

とにかく慌てて名乗った。

「私です。浅井です。あの、何か、」

今度はバーテンが硬直した。

え？何？と浅井も硬直に付き合った。

そしてバーテンは少し眉をひそめて、ブルゾンの内ポケットから袋を取り出した。

「君島から本預かって来ました。

あなたにお返しすればいいんですね？」

バーテンは、文庫本を差し出した。

浅井はまた口を開けて硬直した。

「ちよつとー！！！！あれっ！！！！！」

「全然偶然じゃないじゃない！」

「なに？浅井さん！なんなの？！」

「どういうこと？なんでバーテンまで？！」

「何か渡してるし？！」

「だから言ってるじゃないの！」

ここまでくると水を掛けているのか油を注いでいるのか栗尾にもわからない。

「若い子が好きなの！若ければなんでもいいのよ！」

真向かいで眺めている大沢も硬直していた。

バーテンだ。

俺の大嫌いなバーテンが浅井さんと話している。

あのチビと待ち合わせのはずなのに。

あのチビでも許せないのに。

どうしてバーテンだ。

どうしてあの何もかも持っているバーテンだ。

「君島、君は？」

驚きすぎて、疑問が多すぎて、浅井はやっとそれだけを口にした。

「三日酔いで潰れてます」

バーテンが即答した。

「三日……」

浅井が視線をバーテンから外して、三日前を思い出す。

土曜日。土曜日から。

私と別れたあの後から飲み続けた？

「だってあの子、お酒弱いじゃないの・・・」

そして、初めて会った日も思い出した。

あの子、たったカクテル2杯であんなに酔ったのよ。

弱いくせにここまで来れないほど飲んだの？

そんなにも私はあの子を傷つけたんだ。

それを謝る機会も、もうないんだ。

浅井は俯いた。

せつかくできたともだちを、失った。

「うん。弱いんで量は飲んでないでしょう。まだ生きてますから早々死なないでしょう」

頭の上から、低い掠れた声が降って来た。

え？と顔を上げると、バーテンがまだ本を突き出したまま浅井を見下ろしている。

「えっと・・・あなたは、君島君のともだち？」

「いや。知り合い」

ともだちじゃない？知り合い？

「だって、この本わざわざ代わりに届けにきてくれたんでしょ？」

「二千元で引き受けた」

思わず吹きだした。

文庫本2冊配達で2千円なんて！高すぎる！

笑い出した浅井を見て、バーテンが顔を顰めた。
それを見て浅井が更に笑った。

笑って、体の中の澱んだ気分が吐き出されたような気がした。

そして目の前の、嫌そうな顔で見下ろしているバーテンに、希望を見出した。

「君島君のところに連れて行って」
「は？」

これを逃せば、一生君島君に会えなくなるかも知れない。

「中川区でしょ？バイクで20分も掛からないわよね？」
「嫌です」

「5千円出す」

「嫌です」

「1万円」

「……」

「決まり！」

ともだちでもないという君島君の頼みを2千円で受けたのなら、他人の私もお金で運んでくれるだろうと、浅井は読んだ。

「あなた、スカートじゃないですか」

「大丈夫よ。脚には自信あるから」

「なんですかそれ」

バーテンが折れつつある。拒絶理由が弱い。

追い討ちになるのかどうか、浅井が言葉を続ける。

「私も時間がないから、ちょっと行ってすぐ戻ってもらえばそれでいいの」

バーテンがまだ躊躇っている。

「嫌だなあ……。タンDEM嫌いなのに……」

「タンDEMって何？」

バーテンがさらに眉間のシワを深くした。

段々それが面白くなってきた。

「荷物だと思って」

「荷物の方がマシだ」

多分、落ちた。

だから浅井が笑って催促した。

「早くしないとこれ、倒しちゃうよ」

足でバイクのタイヤを倒す仕草を試みせた。

やっとバーテンがバイクの準備を始める。

後部のステップを両方倒して、浅井にヘルメットとグローブを渡した。

「私が被るの？」

「飛ばしますから」

ふうん。とヘルメットを被り、グローブを嵌めると、バーテンは既にバイクの方向を変えてエンジンを掛け、シートに跨って浅井が乗り込むのを待っていた。

乗せて、と簡単に言ってみたものの、足の掛け方から難しいわ、と浅井は悩んだ。

右手でこっちのグリップを掴んで、左足をこっちのステップに乗せてください。

バーテンが親切に説明してくれた。

そこまでは親切だったが、走行中は俺に掴まらないでください、自力で姿勢を維持して下さい、と指示された。

バーテンが一度スロットルを吹かした。そしてギアを落とし、右

を見ながら、今度は慎重にスロットルを開け、重さと速さを確かめながら駐車場から通りに向かう。

そしてあつと言う間に大通りに合流し、車の大群に飲み込まれた。

「嘘」

「すこ」

「まじ？」

コンビニ向かいのビル4階窓には、全社員の顔が張り付いている。そして全員、片言の感想を述べた後は、言葉がない。

あまりに衝撃的だった。浅井はそんなキャラクターではないはずだったのだ。

コンビニで男と待ち合わせという段階から既に衝撃的な話ではあったのだが。

何より、美しい絵だった。

少し長めのバーテンの髪がなびき、自慢するだけある浅井の形のいい脚が膝上からむき出しで、戦闘的なフォームの緑の大型バイクが、クルージングしている車たちの流れをかき分けて飛んでいった。

まるでドラマか映画のワンシーン。

たちまち消え去ったからなおさら強くそう感じる。

こんな展開になるとは想像もしていなかった。

そして今後、どう展開するのも全く読めない。

こんなにも身近に、突然こんなドラマが発生して、誰もが浮き足立っていた。

そしてその美しい絵を、目の前で見せ付けられた大沢も呆然とし

ていた。

一昨日君島に蹴られた以上の衝撃だ。

なぜなら、浅井からバイクに乗ったからだ。

浅井がバーテンに、バイクに乗せると頼んだ。

バーテンは断った。何度か断った。最後まで躊躇った。

浅井がむりやりバーテンのバイクに乗ったのだ。

大沢はそれを、道路を挟んだ向かいから見ていた。

ビルの4階からは、きつとみんなも見ていただろう。

何一つ公表していないのに、ほとんどのことを知っている社員たちもきつと驚いているだろう。

大沢と付き合っているらしい浅井が、大沢を投げ飛ばした男と待ち合わせしているはずなのに、ほとんど知り合っただけのバーテンのバイクに乗って走り去った。

いいツラの皮だ。

大沢は、鼻で笑った。

なんだよこれ？バカにしゃがって。

踵を返して車に戻る。

来るんじゃないかった。いや、正体がわかったただけマシかもな。

浅井さんがそういう女だとは思ってなかった。

あれが正体なら俺の方からお断りだ。

乱暴に車のドアを閉めて、急発進した。

タンデムシートとは言え、バイクには生まれて初めて乗る。本当にめちゃくちゃ飛ばしている。容赦ない。

自力で体勢を維持、なんて不可能だ。

シート横についてるグリップとかいう取っ手を掴んでいても、絶対振り落とされる。

というか、振り落とす気じゃないだろうか。

死ぬ。風圧に耐えられない。落ちる。

ごめん。

と、結局浅井はバーテンのブルゾンの脇を握った。

その途端少しスピードが緩み、反動でうっかりバーテンの背中に頭突きをした。

その後は比較的速度を落としたようだ。

10分ほどで学生アパートらしき小さな建物の前に到着した。

バーテンが肩越しに浅井を睨み、降りて下さい、と言った。

そう言われても、ガチガチに体に入っていたので簡単には体が動かない。

ごめん、とヘルメットの中で呟いて、やはりバーテンの肩に掴まり、よれよれと地面に降りた。

ああ、すごかったなあ・・・。

怖かったけど結構爽快なものだわ。うん。いいストレス解消になりそうだ。

と冷静なつもりでヘルメットを外そうとして、グローブを嵌めたままだったことに気付き、まずグローブ脱がなきゃ、と笑って片方外すと、その手が震えていた。

その手を見て、さらに笑えた。

すごい体験だわ。バーテン君のおかげで。
とバーテンを見上げてから思い出した。

「あ！君島君だった！」

完全に用件を忘れていた。

「206。ドア開いてるので行ってください」

「え？」

開いてる？なんで？で、あなたは？行かないの？と訊く前に、

「俺はここでたばこ吸ってます。時間ないですよ」

と言われ、改めて自分の用件を思い出し、バーテンにヘルメットとグローブを渡して走り出した。

一応チャイムを鳴らしてからドアを開け、君島君？と中に呼びかけた。

返事がない。

勝手に靴を脱いで上がり、1Kの奥のドアを開けた。

きれいに片付いた部屋の、右側半分を占めるベッドに君島はうつ伏せで寝ていた。

「君島君」

もう一度呼ぶと、君島が顔を上げた。

また目と鼻を赤くしてぼんやりしている。

次の瞬間その目をバチッと開き、ガバッと上半身を起こした。

「浅井……さん」

むくんでまぶたも腫れて子供のようなその顔に、Ｔシャツから覗くアンバランスな太い筋肉質の腕。

「え？あれ？なんで？僕、」

その高い声からは想像もつかない土曜日の獣のような姿。

「なんで、来たの？」

でもやはり寝起きの子供のような、今にも泣きそうな情けない君島の顔。

「返しに来るって、言ったじゃない」

腹が立ってきた。

「待ってたのよ。ともだちだって、言ったわよね？」

腹が立って、涙が出そうだ。

「言いたいことだって訊きたいことだってあるのよ。それなのに、来てくれないなんて」

涙が出そうだ。

浅井はそれ以上続けられずに俯いた。

「だってさぁ・・・」

君島が呟いたので浅井も顔を上げると、君島はとっくにサメザメと泣いていた。

「僕だって好きでこんな顔なんじゃないのに」

あ。

と、浅井の涙が引つ込んだ。

「僕のせいじゃないのに」

君島の目からはぼろぼろと涙が落ちる。

「いつまでもこの顔で差別されるんだ」

美しい泣き顔なので、悲しさが倍增されている気がする。

「いつでも、ばかにされるんだ」

こんなにも美しい子に涙を流させるなんて……。

浅井もつい慰めようとして、君島く、まで言いかけた。

それと同時に、低い掠れ声が響いた。

「まだ言ってるのか。いい加減正気に戻れ。鬱陶しい」

それを聞いて君島が枕に顔を埋め、一層高い泣き声で言った。

「ひどいでしょ！全然いたわってくれないんだよ！こんなに友達が泣いてんのに！」

「ともだちじゃない」

「こんなことまで言うんだよ！ひとでなし！」

「なんとでも言え。俺は充分迷惑をかけられた。もうたくさんだ」

え……それはひどいんじゃないですか？

浅井はときどきして、いつの間にか後ろに立っていたバーテンを覗き見た。

バーテンは冷徹な表情で君島を見下ろしている。

見下ろされている君島が、涙をためて真っ赤な目を浅井に向けた。
「ひどいと思わない？」

思う……。と思いながら浅井が再びバーテンを見上げた。
そしてバーテンが表情を変えずに、口を開いた。

「昨日もバイト明けに実験の続きがあつて、部屋に戻ったのが朝方。
風呂入って寝ようとしたら、こいつから酔い潰れてるから迎えに
来いって電話がきて、

まっすぐ立つこともできないこいつをバイクでここまで連れてき
た。

来たもののここは足の踏み場もないくらいの汚れ様で、さっきま
でかかってここまで掃除した。

俺は一睡もしてないんだ。これから学校だしな」

……！すごい！君島君、それはかなりの迷惑かも……！
ていうか、そこまでするんだ？バーテン君……！

「う……。思い出したら気持ち悪い……………」

君島が再びベッドに倒れた。

「まだアルコールが抜けてないから絡むんです。ほっとけばいいで
すよ」

そう言いながらバーテンは君島に目もくれずに勝手にクローゼツ
トに手をかけた。

「君島。ヘルメット借りるぞ」

扉を開くと、ばさばさと物が落ちてくる音がした。

バーテンがそれを見下ろして言った。

「お前、クローゼットできのこ栽培してんのか」

「ヘルメット……は、洗面所だよ……。なんでそんなの……」

「洗面所？」

バーテンがさらに眉間のシワを深くして君島を見下ろした。

「うん。いつでもきれいにしてる……」

あほか、とバーテンがつぶやきながら洗面所に向かった。

「ヘルメットって……。なんでさ？」

君島が訊いたが、バーテンはすでにいない。

「なんでかな……」

君島が浅井を見上げた。

「多分、私用だと思う」

浅井の返事に、君島がしばらく反応しなかった。

バーテンが黄色いヘルメットをぶらさげて戻ってきた。

「あんな湿度の高いところに置いておくと内装がやられるぞ。どうでもいいけど」

「ヘルメット……どうすんの？」

君島がぼんやりとバーテンに訊いた。

「借りる」

「だから、なん……。あっ！！！」

また君島がガバッと上半身を起こした。

「バイクで？浩一の後ろに乗ってきたの？浅井さん？」

「うん。そう言わなかった？」

「言っていない！聞いてない！え？乗せたの？浩一が？」

君島が驚いてバーテンに顔を向けた。

バーテンは指を一本立てた。

「往復一萬円で請けた」

「一万・・・って、お金？！お金取るの？浅井さんから？！やめてよ浩一！なんてことするんだよ！」

君島が表情を一変させて、バーテンに怒鳴った。

「俺がボランティアでこんなことするわけないだろ」

バーテンは表情を変えず、低い声で言い捨てた。

君島は次に浅井を向いて、同じ調子で言った。

「だって、浅井さんだって、浩一のこと知らないんでしょう？それなのになんで、」

浅井もバーテンを見習って、冷静に答えた。

「知らないからお金で乗せてもらったのよ」

「だってそんな、僕が行くって言ったのに、」

また君島の表情が変わる。今度は自責に眉をひそめた。浅井が少し笑った。この顔を利用しようと思いついた。

「あ、そうね。この一万円の出費は君島君のせいだわね
君島が口を噤んだ。

「一万円分、君島君は私に負い目があるのよ。いい？」

「負い目って・・・？」

「あのね。あなたから勝手にサヨナラなんて言わせないわ。いい？」

「・・・」

「だって私のせいじゃないでしょ？私が悪いんじゃないもの。それなのに勝手なことされちゃ困るわ。わかった？」

「・・・」

「また電話するし、とらなかつたらここに来るから」
顎を上げて、笑顔で君島を見下ろした。

君島は唇を尖らせて俯いた。

「うん。これで用は済んだわ」

浅井が笑って見上げると、バーテンが頷いて黄色のヘルメットを渡した。

「君島君、これ借りるね」

「浅井さん・・・」

君島が呟いた。

「バイクの後ろでも気をつけて乗ってね」

バーテンが振り向かずにもた言い捨てた。

「そのためのヘルメットだろ」

また鍵を掛けずに部屋を出て、浅井はバーテンの後ろを歩きながら、今の出来事に満足していた。

コンビニで説得よりもむしろ効果的だったわ。自宅に押し掛けて恩を着せるなんて考えてもいなかった。

全部バーテン君のおかげね。バーテン君と君島君が知り合いだった偶然のおかげだわ。

でもどんな知り合いなのかしら・・・？と、浅井は黄色いヘルメットに目を落とした。

「あ、そうか。あなたと君島君って、バイク仲間なの？」

「え？いや、あいつはバイクどころか何の免許も持ってませんよ」
バーテンが振り向いて答えた。

「だってこのヘルメットは・・・？」

「俺のバイクに乗るために買ったらしいですけどね」

「じゃ、やっぱり仲いいんじゃないの？」

「いや、一回も乗せたことないです。ああ、昨日初めて乗せた」
階段を下りたので、浅井がバーテンを見上げて言った。

「昨日・・・？君島君酔いつぶれてたって」

「はい。電話が途中で切れたから死んだのかと思って死体を見に行ったら生きて転がってたんです」

浅井は、吹き出した。

「行かなきゃよかった」

「でも、」

浅井が笑いながらフォローした。

「でもおかげで今日は1万2千円稼げたじゃない」

「ああ、そういう考えもあるか」

浅井はさらに笑った。そしてポケットから財布を出して札を差し

出した。

「本当に助かった！ありがとう」

バーテンが、一万円札を見下ろして、受け取ると同時に言った。

「領収書要りますか？」

おかしな子だ、と浅井は笑い続けていたが、

「あ、そうか。それは君島君の弱味の証拠になるわよね。うん。頂戴」

と答えた。

多分これっきりの、バーテンのタンDEMとかいうツーリングの記念だし、君島のための散財の証拠なのだから君島に会えるフリーチケツトのようにも思えた。

楽しくて浅井は笑顔でバーテンを見上げると、バーテンは顔をしかめていた。

言うてはみたものの、紙もペンもないのだな？と推測してさらに楽しくなった。

「今度会うときに頂戴。またここで会うかも知れないし、バーで会うかも知れないしね」

バーテンがさらに眉間のしわを深くして顔を背けた。

それを見て浅井はさらに愉快になってしまった。

「浩一って名前なのね。苗字は？」

バーテンは答えずにヘルメットを被りバイクにまたがった。そして浅井が乗り込むのを待っている。

浅井も君島の黄色のヘルメットを被って、最初よりは上手くタンDEMシートに座った。

そしてバーテンも、帰りは来る時よりも穏やかな走行になっていた。

会社に着してヘルメットを脱いで渡しバーテンにお礼を言った

が、バイクのエンジンも切らずヘルメットも脱がないバーテンには聞こえていないようだ。

だから大声で言った。

「苗字教えてくれないと私も浩一って呼ぶわよ！」

バーテンは眉間をシワシワにしたまま、はっきりと「原田」と答えた。

「ありがと！原田君！またね！領収書忘れないでね！」

原田は返事もせずに動き出した。

あつという間に交差点をＵターンして走り去ったが、浅井はその姿が視界から消えるまで見送った。

エレベーターから降りて浅井が事務所に入ろうとした時に、廊下で田村に呼び止められた。困ったような怒ったような顔をしている。「さっきのあれ、・・・大沢にその、あいつこの前のことでただでさえ落ち込んでるってのにさ、今度別の男のバイクに乗るって、」ぐだぐだとはつきりしない田村にいらついて、浅井がはつきり言った。

「この前のことも今日のこと、大沢君のせいよ」

田村が絶句する。

「全部大沢君が悪いの。文句言ってるのならそんなこともわからないのって伝えておいて」

言い捨てて浅井が踵を返した。

田村には何がなんだかわからないが、始まったばかりのこの二人が早くも危機だということは分かった。

さあ、どうしようか。と跳ねるように階段を下りて自分の車に向

か
っ
た。
。

パチンコ屋の駐車場に車を停めて、大沢はハンドルに顔を伏せていた。いくら頭を振ってもあの残像が焼きついて消えない。

もうたくさんだ。

女に不自由したことのない大沢が、ここまで恥をかかされたことは初めてだ。そのことだけで腹が立って仕方がない。そんな女じゃないはずの浅井が大沢が告白してからこんな女になったのだしたら、見抜けなかった自分がバカだ。

ああ・・・うんざりだ！

しばらく運転席でぐずぐずしていると、携帯が鳴った。会社で持たされているものだ。無視するわけにはいかない。

「はい。大沢です」

「おお！俺！田村！」

「ああ」

「今日飲みにくいこうぜ！」

通話を切った。

田村はあの時本社事務所にいて、浅井がバイクに乗るのを恐らく事務所内の全員と見ていたはずだ。

俺を慰めるつもりか笑いものにするつもりか知らないけど、冗談じゃない。

電話を助手席に放り出した。

直後にまた鳴り出した。

しばらく鳴らした後で渋々取った。

「はい、大沢」

「大沢君？私！栗尾です！今大丈夫？」

これも勘弁してくれ・・・と大沢はシートに背中をもたれかけた。

『今日仕事終わったらちよつと飲みに行かない？いい店見つけたんだけど！』

大沢は返事をしない。

『もうすぐクリスマスじゃない？どこでパーティしようか探してるそこなの！一緒に行ってももらえない？』

クリスマス。予定はキャンセルだな。何も決めてないけど。

『どうせ大沢君はクリスマス予定があるんでしょ？その前に一度飲もうよ！』

こいつ……。今日のことに触れない。

『別に私は大沢君が誰と付き合っても構わないけど、大沢君気にする？』

それ以上か……。それ以上のことを、言ってるのか。

『それに、大沢君が誰と飲んだって何にも言わないでしょ？』

「ああ。どこに行けばいい？」

『ふふ。行ってくれると思った！定時で終わるから、6時に名駅！』
忘れていた。元々俺は女とこういう付き合いをしてきたんだった。

「わかった」

栗尾が誘っているのは、酒とそれ以上のことだ。そして大沢はそれを受けた。

大沢はずつとそういう付き合いをしてきた。付き合いしていない女と関係を持つ。関係を持つてから付き合い合う。付き合いを止めてからも機会があればホテルに行く。

それが俺の女との付き合い方だ。浅井さんが言っていた南営業所の事務員とも付き合っではないがホテルには行った。

それなのに浅井さんに限っては、気付けば先に好きになっていて声もかけられずに、あのチビの言うような今時小学生でもやらない片思い。

気のせいだったんだろう。何か勘違いしていた。俺はそういうタイプじゃないんだ元々。

だいたい浅井さんのようなタイプと付き合ったことなんか一度もなかった。

どうかしていた。

まあいい。栗尾とホテルにでも行けば気が晴れるだろう。浅井さんに知られても構わない。

大沢はシートに座りなおし、キーを回した。

午前中仕事が手につかなかったせいもあり、定時で終わることができなかったため事務所に部長と浅井の二人きりになった。

それでも9時前には片付け、挨拶をして帰ろうとしたら呼び止められた。

「浅井さん、昼間のことなんだけど・・・」

・・・うつゝん・・・。休憩時間に何をしようと自由ではあるのだけれど、さすがに会社の前のコンビニでのことだから部長も見てたのかと恥ずかしくなった。

「はい、あの、みつともないことをしました。以後あんなことはしません。失礼しました」

「いや、それもそうなんですが、
「は？」

部長が今一齒切れが悪い。

「その、昼間の彼とはお付き合いが？」

「いえ、とんでもない」

「では田村設備の大沢くん？」

・・・なぜ部長にバレてる・・・？

「やはりそうですか・・・。そうですね・・・。何から話したらいいか・・・」

部長が片手で額を押さえた。

なんだろう一体。

「浅井さんは、以前親しい男性を事故で亡くしてますね？」

・・・・・・・・え・・・・・・・・

「実は知っていたんです。履歴書をいただいた段階で、社長があなたの名前を覚えてましてね」

「どうして」

浅井の血の気が引いた。

「事故から何ヶ月も経ってない時期でしたし、社長が大変同情してましてね。即決でした。そして本来あんなことはしないものなんですけど、親御さんに連絡をしまして」

浅井が目を閉じた。

「なぜか住所も電話番号も履歴書と違ってましたが、あのあたりに浅井さんは3軒しかないんですね。104で訊いて最初の浅井さんでしたよ」

親とは縁を切ったつもりだった。

「不幸な娘なので就職はなんとかお願いされました」

聞きたくない。なぜそんなことを今。

「実はですね。本題は、大沢君なんですが」

頭がガンガンする。

「彼と別れてもらうことはできませんか？」

何を言われてるのかわからない。

「社長の縁続きの娘さんが大沢君とお付き合いを始めたいそうなんですよ」

浅井が顔を上げた。

「この不景気に解雇されるのも大変ですよ。転職に有利な年齢も過ぎてますよね」

脅しですか。しかもこんな前時代的な。いつもの浅井ならそう言うかも知れない。

しかし今はいつもの浅井ではない。

礼をして俯いたまま、会社を出た。

親とは縁を切ったつもりだった。

先輩を亡くした時、浅井がまだそれを受け入れられずにいた時、浅井がまだ入院していたその枕元で、母はまず先輩を罵った。

死んだ人を悪く言ってもしょうがないけどね……。恥知らずな真似してくれたわ。

嫁入り前の娘を本当に傷物にするとはね。あんたもあんたよ。町中で噂になるわ。恥ずかしい。

浅井はベッドの中で体を固く丸めて自分を抱きしめ、息を止めて耐えた。体が震えていることを知られないように。

声を失っていた浅井に反論はできなかった。そうでなくても、そんな侮辱を晴らせる言葉なんか知らなかった。

絶対許さない。浅井は唇を噛んだ。涙が出ないように。

絶対許さない。許す必要なんかない。

親なんかいららない。先輩だけでいい。
他に、なにもいららない。

そして浅井は退院した後に勝手に大学をやめ、声が戻ってから仕事を探し、決まってから引越しをし、親を捨てたつもりでいた。

親も浅井を捜そうとはしなかった。
それを不審にも思わなかったのは、浅井が親のことを一切考えていなかったからだ。

それが、会社からの電話一本のせいだったと今日知らされた。

「不幸な娘なので」

どうしてこの親はこれほどの確に娘の傷を決めるのかと、浅井はぶつけようのない怒りと絶望を同時に噛み締めている。

不幸なものか。私は不幸なんかじゃない。そう自分に言い聞かせてやってきた10年だ。

それなのにこの10年、結局親の監視下にあったようなものだ。
一人で頑張ってきたつもりなのに。
そして自分の未来も自由ではない。

はあ、と、寒い夜空に白い息を吐いた。

それからやっと、大沢のことを考えた。

まだ始まったばかりでここまでの障害が入るなんてよほど縁がない。
い。

そう思うしかない。

今ならやめることもそんなに難しくないだろうと浅井は考えた。
お互いにお互いのことをまだ何も知らない。それならこのまま終えても何も変わらない。

きつと大沢君もそう考えているだろう。

会わなくなつて、電話もなくなつて、何日経つ？それすら数えていない。なにしろ私はずっと君島君のことばかり考えていたのだ。

このまま終えるのが一番いい。

浅井は俯いて家路についた。

約束の6時前に大沢は駅前のど派手なイルミネーションを眺めながらタバコを吹かしていた。

周囲はカメラや携帯をかざした女子やカップルだらけだ。男一人で立っている場所ではない。

どうして浅井さんと見にこなかったんだろうな、と大沢はぼんやり考えた。

そして答えがすぐ出た。
たった一度のデートは場所が違った上に夜までは一緒にいなかった。

はあ、と煙を吐いて灰皿でタバコを潰し、見ておけばよかったなあと後悔した。

多分、もうチャンスはない。

それから首を振って考え直す。

違っただろ。浅井さんは俺が思ったような人じゃなかったんだ。そうだろ。

そして上を向いた。

どうせあのチビやバーテンなんかと見に来たりするんだろ。俺じゃない。

しばらくして、高く響くヒールの音が迫ってきた。

来たのか？と大沢が振り向こうとすると、

「わっ！！」

と脅かそうとするような大きな声を発しながら栗尾が腕に抱きついてきた。

「待たせちゃった？」

覗き込むような上目遣いで栗尾が訊ねる。

「いや」

と答えながら大沢が腕を解こうとした。中学生かよ、と思いながら。

「まずは食事にしよ！なにが食べたい？」

小首を傾げて栗尾が訊いた。

なんでもいい、と答えながら、こんなもんだよな、と大沢は思っていた。

髪の中から足の先まで手入れの行き届いた、ファッションにしか興味がないような女子。

今までそういう相手としか付き合ってたはずなのに、なんで浅井さんに声掛けた？

大沢は首を捻った。どうかしてたんじゃないか？

「なんでもいい？スペイン料理は？」

「スペイン？俺こんな格好だけど入れるのか？」

大沢は赤の派手なブルゾンにカーゴパンツのカジュアルな格好だ。

「大丈夫よ。スペイン料理って言っても家庭料理風だから、堅苦しくないし」

それならそれでいい、と言うと栗尾は大沢の手を引いてイルミネーションで飾られたビルに向かって歩き出した。

ヒールの音が響く。

そうだ。浅井さんはヒールが低かった。背が高いせいもあるだろうけど。

それにバッグ。栗尾の小さいバッグには一体何が入れるんだ。浅井さんのでかいバッグにはきつと仕事に使うものも入ってたんだろう。

そういうタイプとは付き合ったことがなかったのに、俺は何を考えてたんだ。

「すごいね、イルミネーション！」

「そうだな」

そうだよな。こんなもんだよ。

何度もそう繰り返しながら、大沢は結局浅井のことを考えている。

そして同じように、栗尾も浅井のことを考えていた。浅井の生まれ故郷での調査報告が届いたのだ。

「ねえ、あの人。浅井さん？北陸出身なのよね。肌きれいだもんね」
またしても美しい物語を掘り出された。

「結構いいお宅の優秀なお嬢様？今どき男女交際禁止だったのを、隠れて野球部のキャプテンと付き合ってたんですって！ホントに見かけによらない人よね！今日自慢してたんだけどっ！」

悲劇に終わっているのに、悔しい気持ちを抑えられない。

「自分で言ってたんだけどね！本当は東大合格できたんだって！わざと落ちてこっちに來たのよ！彼が先にこっちの大學に來てたからですって！」

自分はこれほど劇的な恋愛をしていない。

「聞きたくねえよ。そんな話」

大沢が吐き捨てた。

「そうよね！どうでもいいわ！あんなオバサン！」

栗尾が大沢の腕に絡みついた

「せっかくの食事が不味くなるわ！」

二人でエレベーターの前で立ち止まり、話題を失って沈黙した。

部屋に戻り、浅井はすぐに風呂を入れて、透き通ったピンクの柔らかな球を放り入れた。

殻が溶ければ湯を白濁させてバラの芳香を放つこの入浴剤には、先輩の思い出が閉じ込められている。

本当はあまり使いたくない。残りが少ないから。そして、先輩を思い出すのが辛いから。

しかし今日は、先輩に頼りたい、甘えたい、今日は先輩に会おう、そんな思いで浅井は家路を急いできた。

先輩が野球部の飲み会でビンゴの景品にもらって来た入浴剤。

先輩は野球部が忙しかつたために、あまり浅井の部屋にはこなかった。会う時はほとんど浅井が先輩の部屋を訪れた。

先輩の部屋の風呂は、少し大きめではあったもののとても二人で入れるようなサイズではなかった。

しかも先輩は大柄だし浅井も長身だ。それなのに、一緒に入ろうと誘ってくる。

いやです、と拒否しても、なんで？とまったくきょとした顔で訊いて来る。

恥ずかしいから、と答えても、何が？とまったく取り合わず、それ以上の反論が思い浮かばないうちに服を脱がされ浴室に引きずり込まれ、浅井の好きなピンクの球を湯に放り込む。

事故後まだ退院する前、母が一時自宅に戻った時に病室を抜け出し、先輩の部屋に向かった。

まだ信じられないのと信じたくないの間の現実味の薄い世界に浅

井はいた。

まず自分の部屋に戻り先輩の部屋の合鍵を持って自転車で走った。やはり現実味は薄かった。こんな時間に、午前中に、先輩が部屋にいるはずがないのだ。先輩はこの時間、グラウンドにいる。部屋にはいない。

部屋に着いて鍵を開けて先輩がいなくても、だから何も感じなかった。いるはずがないのだから。

部屋には何の変化もなかった。まだ片付けにはきていないのだろう。

まだ信じられないでいたのだが、頭の中で了解はしていた。先輩は死んだ。

だから浅井は病院を抜け出してこの部屋から先輩の大切なものを持ち出そうと思って来たのだ。

でも何を？

何を持っていったらいいかな？先輩。

浅井はまだ混乱していた。

信じられないでいるのに先輩の遺品を探す矛盾を受け入れていた。どうして自分は悲しくないのか、涙も出ないのか、分からないまま探し物をしていた。

そして高い棚の上にこの入浴剤を見つけた。

これがいい、と思ったわけではない。

ああ、あんなところに、と腕を伸ばしただけだった。背伸びして腕をいっぱい伸ばしても届かなかった。

そして、後ろを見た。

背後から腕が伸びるはずだった。

こんな時には先輩が笑って取ってくれるはずだった。

骨ばったあの大きな手で

左腕より太くなつたあの固い右腕を伸ばして

それなのに誰もいない後ろを見て、浅井はやっと先輩を失ったことを知った。

そのまま崩れて座り込み、悲鳴を上げた。喉が破裂するほど悲鳴を上げたはずだった。

吹き出た涙が床に落ちてぽたぽたと音を立てた。

聞こえたのはその音と、ヒューヒューと空気が漏れる音だけ。

声を失っていた浅井の喉は泣き声も上げられず、空気が通っていない音を発するだけだった。

これで、生きているのか、と思った。

先輩を失って、泣き声すら出せないで、生きていると言えるのか。

こんな私に、生きる意味なんかあるのか。

ない。

そう思った。

生きる意味なんかない。

先輩のいない世界で生きていく意味なんかない。

生きていく必要なんかない。

そう思いついて、浅井は安心した。

棚から落ちてきた入浴剤を抱えて、浅井は笑った。
涙の溜まった床に転がって、笑った。

そこで記憶が途切れている。

そしてまた病院で目覚めた。

夢なのか現実なのか分からなかった。

ただ、夢でも現実でももう先輩はいないのだと思った。

あなたに比べたら私の不幸なんか不幸じゃないわ、と言われた。

もつと不幸な人は世界中にいるのよ、と言われた。

あなたが後を追ったら先輩は何のために死んだの、と言われた。

あなたが他の人と幸せになることを先輩も望んでいる、と言われた。

始めは意味がわからなかった。

先輩を失ったと頭が受け入れた後はしばらく、言葉が理解できなかった。言葉という概念も失った。失ったということも分からなかった。

何もかもがわからなかった。

悲しい、という意味もわからなかった。

やっと、他人が同情している、私を憐れんでいると気づき始めたとき、浅井は反射的に拳を握り、血が滲むまで爪を手のひらに食い込ませて、溢れそうになる涙を止めた。

人前では一度も泣かなかった。

口の中が血だらけになるまで唇を噛み締め、手の平に血豆ができて拳を握り締め、涙を堪えた。

自分でも理由はわからなかった。

もう死のうとは思わなかった。

そして同情の声が次第に引いていった。

逆に非難の声が聞こえてきた。

先輩の親友には直接言われた。

「須藤のために、少しぐらい泣いてやつてもいいんじゃないの？」

先輩のために

その言葉で浅井の強張った心が溶けかかり、初めて人前で涙を落
としかけたが、その親友は気付かず続けた。

「事故は須藤のせいかも知れないけど、君を庇って死んだのにその
君が泣いてもいないなんて、須藤が可哀想だ」

その言葉で涙が引いた。

その言葉でやっとわかった。

絶対に同情されなくなかったのだ。

先輩を失って浅井が泣き崩れるのが当たり前だと誰もが考える。

こんなに早く逝ってあなたを悲しませて、と続く。

先輩があなたに不幸で悲しい思いをさせている。

浅井が泣くとこれを肯定することになる。

先輩が浅井を不幸にしたと、肯定することになる。

そんなことは絶対認めない。

自分はそれを初めから知っていたのだ。だから泣かなかった。
自分への同情は先輩への非難だ。それが許せなかった。

それなら自分が罵られた方がいい。だから泣かなかった。

浅井はまた、唇を噛んで微笑んだ。

当然、親友は激怒した。

それでいい、と浅井は思った。

私に同情して先輩を責めないでください。

私を罵って先輩に同情してください。

薄情な彼女を持って可哀想に、と。

それが先輩のために浅井ができる唯一のことだと思った。

もう何一つ先輩のためにできることはないと絶望していた浅井には、それが唯一の光だった。

だから笑った。

友人たちとも浅井から連絡を絶った。

同情されてありきたりの慰めの言葉で傷つけられる自分を守りたかった。

そしてその姿を友人に知られたくなかった。

浅井のために、浅井のことを思っているからこそその言葉だとわかっていった。

だからこそ、浅井を傷つける言葉しか選べない友人たちとも縁を切った。

それを友人たちに気付かれなくなかった。

あなたの善意が私には凶器だと、優しい友人たちには気付かれなくなかった。

あの事故で私は不幸になんかなくていない。

先輩のせいで不幸になんかなくていない。

短くても先輩と一緒にいられた時間は私を生涯支えてくれる。

私はその証明をしなければならぬ。

先輩のために。自分のために。

他の誰かと幸せになれるなら積極的にそうする。

しかしそれよりも先輩を思い出している時間の方が幸福だから一人であるのだ。

泣かずに平然と自立することがその証明だと思った。

誰にも邪魔されずに二人だけの記憶を薔薇の香りで再現する。

どんなに泣いても薔薇の香りが先輩のかわりに包んでくれる。
昔はお湯が冷たくなるまで出られなかった。
先輩のいない現実に戻りたくなかった。

ずるいなあ先輩。

私が死にたかった。

私も死ねばよかった。

だってこんなに苦しい。

どうせ死ねないなら、どうせ生きていくなら、一緒に二人ですつ
と生きていきたかった。

こんなに苦しんでる自分を見たら先輩もきつと苦しいだろうな、
と思うようになったのは事故から何年も経った後だ。
先輩は私を大事にしてくれたからね。
浅井は涙を一筋流した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1013y/>

J O Y

2011年12月4日19時54分発行